



特集 / 21世紀の東京大学 ...多様性・国際性・開かれた知の拠点 / 様々な未来像

総長対談 / ゲスト 堺屋太一「日本・近未来の大学像」

教育・研究の現場から / 大学院法学政治学研究科・法学部 / 大学院情報理工学系研究科

世界の中の東京大学 / 東京大学シリコンバレー拠点設立 / 第一回東京大学公開学術講演会

サイエンスへの招待 / 宇宙の地図と銀河の進化 / ITで解き明かす古代中国正統論争

キャンパス散歩 / 東京大学の「登録文化財」を見る

5

2001 10  
October, 2001

- 1: 「多様な知の時代」へ
- 2: 変わらない日本社会
- 3: なぜ変わらないか?
- 4: 「教育自由化論」ふたたび
- 5: 大学入試と就職
- 6: 雇用の変化
- 7: 「永遠なる組織」の終焉
- 8: 大学の知的生産への期待
- 9: 大学と社会の関わり
- 10: 「法人化」
- 11: 大学をマネジメントする
- 12: 近未来の大学像は?

# 日本・近未来の 大学像

21世紀、世界は大きく動いています。  
グローバルな社会経済の動向の中で、  
日本は、そして日本の大学は、どのように変貌してゆくのでしょうか。  
今世紀最初の「総長対談」は、明日の大学像の指針について、  
本学OBで作家・元経済企画庁長官の堺屋太一氏をお招きして、  
佐々木毅 新総長と自由な意見交換をお願いしました。

「淡青」について  
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

平成13年4月より、佐々木毅新総長が就任し、新しい世紀の東京大学が第一歩を踏み出しました。創立以来120年を越える東京大学の歴史の流れの中で、今21世紀の東京大学として、新たな飛躍を試みようとしています。そこで、今号と次号で、「21世紀の東京大学」の特集を企画致しました。今号は、東京大学の内部からの視点で、次号は東京大学の外部からの視点で、今後の東京大学の将来を展望していこうと考えております。総長対談は元経済企画庁長官の堺屋太一氏をお迎えし、今後の大学のあり方も含めて、佐々木毅総長と語り合っていました。

東京大学では、社会に向けて積極的な情報発信を進めています。対外広報誌「淡青」もその一環として、今まで以上に充実を図っていきたくと考えております。また、今号では今後の「淡青」の更なる充実のため、読者アンケートを行いますので、ご意見、ご感想をお寄せいただければ幸いです。

(東京大学広報委員会委員長 石川 正俊)

## CONTENTS

01

[総長対談]

ゲスト 堺屋太一「日本・近未来の大学像」

13

[特集]

21世紀の東京大学

・・・多様性・国際性・開かれた知の拠点/様々な未来像

22

[教育・研究の現場から]

大学院法学政治学研究所・法学部 / 大学院情報理工学系研究科

24

[世界の中の東京大学]

東京大学シリコンバレー拠点設立 / 第一回東京大学公開学術講演会

26

[サイエンスへの招待]

宇宙の地図と銀河の進化 / ITで解き明かす古代中国正統論争

28

[キャンパス散歩]

東京大学の「登録文化財」を見る

佐々木 毅 Sasaki Takeshi

1942年生まれ。65年東京大学法学部卒。68年から法学部助教授、73年法学博士、78年より同教授、90～92年評議員、98～2000年大学院法学政治学研究所長、2001年4月より第27代東京大学総長に就任した。

堺屋 太一 Sakaiya Taichi

1935年生まれ。作家、内閣特別顧問、元経済企画庁長官。東京大学経済学部卒。通産省入省、日本万国博準備室、大臣官房企画室、沖縄開発庁を経て退官。作家・評論活動に入る。石油輸入を断たれた日本のパニックを描いた小説「油断!」でデビュー。大胆で緻密な構想力をもとに歴史小説にも新境地を開く。経済社会の潮流を洞察した評論も発表し、数々のベストセラーを生んでいる。著書に「知能革命」(PHP研究所、85年)、「組織の盛衰」(同、93年)、「創国論」(同、96年)、「大変な時代」(講談社、95年)など。

## 1 「多様な知の時代」へ

【佐々木】 私は堺屋さんのいろいろなご本、とくに九〇年代以降お書きになったものを読みまして、「大変な時代」<sup>(1)</sup>など印象深く記憶しておりますが、そこで一貫して言われておりましたのが、いわゆる五五年体制がさまざまな面、すなわち、組織の面、制度の面、政策の面で終わった、「戦後の日本」というものが終わったということでした。また、そこでは、人間の生き方の面まで含めて議論を展開されて、多くの日本人に非常に大きなインパクトを与えたと思います。いよいよ二一世紀になりました。あそこで展開されたご議論からみて、日本はどの程度変わったのか、あるいはどういう方向に進んでいるか、ご意見をお聞かせ頂きたいと思うのですが。

(1)「大変な時代」一九九五年、講談社。政界、財界、経済、経営、社会という五つの「五五年体制」が崩壊し、高齢化、国際化、成熟化、情報化の「四化」を鍵に、「ローコスト化」の重要性を提言。

【堺屋】 二〇世紀を一つの文明の時代としてみると、二〇世紀は一九一四年の第一次世界大戦で始まって一九九〇年の冷戦構造とバブル景気の崩壊で終わったのではないか、という気がするのです。この七五年間のものではないか、という気がします。二〇世紀というのは、近代工業社会のいちばん頂点に向かった時代、つまり規格大量生産を徹底して、全社会的にやってきたという気がします。

そのなかで日本は、とくに戦後二〇世紀の後半に近代化に大成して、そして八〇年代にはジャパン・アズ・ナンバーワンと規格大量生産の近代工業社会では世界一になった。

ところが世界中は、だいたい八〇年代に方向転換して、規格大量生産から多様な「知」の時代が変わってきた。このタイミングのずれが八〇年代の日本のバブル

を他国よりも大きくし、九〇年代を非常に不安定にして、経済的にも社会的にも政治的にも困難な時代を招いた。

だから、いま二一世紀を迎えた時点では、日本も早く多様な知の時代、「知価社会」<sup>(2)</sup>に追いつかなければいけないのではないかと気がするのです。この二〇世紀の間に、もちろん産業経済政策もそうですが、文化の面、とくに教育の面でも規格大量生産に向けた人材を育てることを目指してきました。これが小・中学校の国民学校制度、それを引き継いだ一学校一学区の基礎教育、平等を主眼とした中等教育、そして膨大な数の大学をつくった。平等な教育は画一的な成績基準になるので、ますます受験競争が激しくなり、辛抱づくめで協調性があった共通の技能と倫理はもっているけれども、独創性と個性のない人を育てる結果になります。これが結果として八〇年代の繁栄になり、九〇年代の困難になっているのではないかと気がします。

(2)知価社会「知価革命」一九八五年、PHPで提唱された工業化以後の社会概念。先行するダニエル・ベルの「脱工業化社会」、アルビン・トフラーの「第三の波」などより踏み込み、「知」が価値の中心となる社会の未来像を大胆に予言した。

【佐々木】 なるほど。いまおっしゃられたように、日本とほかの国とのサイクルが、少なくとも一〇年くらいずれていると思うのです。ほかの国々では、堺屋さんがお使いになる「知価社会」に相当するものを、ポスト・インダストリアル・ソサエティ、いわゆる「脱工業化社会」と呼んで、七〇年代ぐらいからいろいろな人が言いたし、その社会的・経済的含意を皆さんその当時から考えていたと思うのです。しかし日本ではその後、まさに二〇世紀の文明を代表するいろいろな組織、たとえば官僚制というのが非常に大きな影響力をもって

きた。企業の組織も、われわれから見ると官僚制とかなり似た体質をもっている感じがします。

## 2 変わらない日本社会

【佐々木】 いまのお話を受けて私なりの感想を申し上げますと、日本はなかなか変わらない、「変わりにくいなあ」という感じがこの一〇年間しているのですが……

【堺屋】 正直言って、一九九八年、参議院選挙で橋本内閣が退陣し、その後、小淵内閣ができた時点、それまでじつは何も変わってなかったです。橋本さんは変えようとして行政改革に手をつけられた。これは非常に大きな成果を生んで、今年一月から省庁も再編されているわけですが、それを除きますとほとんど九八年まで、日本は規格大量生産体制のままでした。だから依然として終身雇用が続いていると思っただけで、業界協調体制は鉄壁だった。官僚主導は非常に強かったし、個性のある人は嫌われた。そういう戦後体制、規格大量生産体制が完璧で揺るがなかったと思います。

二〇世紀というのは、一九世紀から引き継いだ近代思考の時代で、その後半というか頂点に達する時代なのですけれども、そこでは有価財を生産するのに最善の方法をとり、それをかぎりなく尊重する。したがって法人の組織、つまりモノに対する所有権を主張する組織が「永久」になった。そして、そこに人間がくっついていて、人間は出たり入ったりしても法人は変わらない。

その法人のいちばん大きく強いのが国家です。国家が二〇世紀ほど強くなった時代はないでしょう。任意の国民を戦場に引っ張り出せるようになったのは第一次世界大戦からなのです。それが二〇世紀にはあたり

まえになつていました。しかし、ベトナム戦争でそれが批判され、アフガニスタンでいよいよだめになつて、いまや国家は大崩壊なのです。

その国家が世界的に崩壊しているときに、ソ連や東欧諸国が崩壊した後まで国家主導を続けようとしたのが日本だったのではないか、という気がするのですね。いまはまだ崩れたわけではないし、部分的に崩壊というか弱まっていますけれども、依然として官僚主導という雰囲気非常に強いですね。

そういう日本社会の「二〇世紀性」というのは、いつどのようなかたちで、「二一世紀的な「知能社会」」に変わっていくか。これはそんなに長く時間をかけられない話だと思つたのです。そういう意味では、人材育成も含め非常に興味ある時点にきているのではないのでしょうか。

### 3 なぜ変わらないか？

【佐々木】 私もその点はまったくその通りと思つたのですが、それにしてもなぜ変わらないのか？ 変わらない秘密といましようか、何か理由があつて変わらないのか、あるいは他の選択肢、チョイスがないから、ただ続いているということなのか。このへんはどんなふう理解すればいいでしょうか。

【堺屋】 まず一つは、経済社会の問題、教育の問題、地域構造の問題、情報の仕組み、いっさいが規格大量生産型にできてしまったから、きわめて揺るぎが少ない。そういう全体を変えなければいけないということが一つある。

もう一つは、高度成長時代の成功体験でしょうね。この成功体験から脱することが非常にむずかしい。私は「組織の盛衰」<sup>(3)</sup>という本で「組織の「死に至る病」」を三つ書いたのです。第一は機能組織が共同体化する

こと。第二番目は環境への過剰適応。第三番目は成功体験への埋没。この三つが日本の大企業、官庁といったいわゆる「立派な組織」には全部起こっているような気がします。

<sup>(3)</sup>「組織の盛衰」(一九九三、P.H.P.)。戦後の未曾有の繁栄をもたらした日本の巨大組織の問題点をケーススタディを通じて分析、新しい組織のあり方を提唱した。

【佐々木】 つまり、それらが相互にもたれ合つて、補完関係にあるから、一つを変えただけでは全部が変わらない。あるいは変えようとすると、緩いシステムと違いますので非常にむずかしい。この問題は結局、突き詰めてゆくと人間の考え方、社会との自分の関わり方みたいな点にまで及ぶでしょう。けれども、細かく見ていきますと現実にはいろいろな変化が起こっていると思います。

【堺屋】 よく笑話のように言つたのですが、日本ではビル・ゲイツよりも財務事務次官の方がえらいと思つている人がだいたいいる……

【佐々木】 そうでしょうか(笑)。

【堺屋】 と言つと、日本人の多くは笑わないのです。アメリカで言つとみんな笑つたのですが(笑)。それぐらい社会評価が安定しているものだから、改革をするとなぐ後戻りばねがききまして、なかなか改革したはずなのにもへ戻つているという例が多いですね。

### 4 「教育自由化論」ふたたび

【佐々木】 少し大学の話をしていただきますが、これは私もそんなによく勉強したわけではないのですが、少なくとも戦後日本社会のほうは、はるかに戦前よりもある意味で同一的、一体的、あるいは同じシステムが相似形でもつていろいろなところに作られて

きた、という感じがします。教育システムは戦後のほうがはるかに一次元的に、ある種の社会的民主主義というか、大衆主義というか、そういうもののいわば受け皿として働いてきた。気がついてみたら、ものすごく同一的な社会組織の重要な一環をなして、もうどうにもならないという形で、じつは大学の関係者も過ごしてきたのではないかと思うのです。このへんは規格大量生産システムと関係あるというお話でしたけれども。

【堺屋】 昭和一六年に「国民学校令」というのができて、基礎教育、初等教育について各自治体の運営する公営制にする、私立学校はなるべく減らす、公営学校についてはすべて住居によって強制入学制度にして、生徒と父兄が、つまり教育の消費者が選択する余地をなくしたのである。それによって各学校に平均的生徒群がいる。どこの学校にも音楽の好きな子ども、算数の上手な子ども、体育が得意な子ども入るようにした。そうすると個性的な教育ができない。音楽に重点を置くといつと、あとの子どもは怒つちゃう、という仕掛けをつくつて、一つの型にはまった教育をした。これはナチスのフォルクスシュレ(国民学校)とまったく同じ制度ですね。それを戦後、通学区域をそのまま引き継いだ。これは思想的な問題もありますけれども、それ以上に経済的・社会的に交通が不便とか、校舎が足りないとかという問題があったのでしよう。そして大量の団塊の世代を教育しなければならぬということでした。

ところがその段階で教育指導の方針が長所を伸ばすより欠点をなくしろということになった。そのため長所も欠点もない「まん丸人間」をつくる。これが非常に規格大量生産に向けた人間なのです。規格大量生産に向けた人間というのは、辛抱強くて、協調性があり、共通の倫理と技能をもつていて、そして個性と

獨創性がないことなのですね。そういう人間をつくるという教育システム。それにあわせて「まん丸人間」を受験という競争にさらすのですね。

最近ようやくこの話を聞いてくれる文部官僚が出てきたのですが、昔は「教育の場における競争」といったら受験競争のこと、つまり教育の消費者・買い手の競争であって、教育の売り手・供給者の競争とは思わない官僚が多かったのです。だからもともと教育の場に競争原理を取り入れたらという「いや、これ以上、受験競争が激しくなったら大変です」と言われませんでした。

だいたいよろず万物をみるに、供給者が競争をして、消費者がより取り見取りで選択するのが市場経済の原則です。供給者が威張っていて消費者が行列をつくって競争しなければならぬというのは悪い状態なのです。

【佐々木】 耳が痛い話だ(笑)。

【堺屋】 これを教育にあてはめると、学校と先生が競争して、生徒と父兄はより取り見取りと、こういう体制にすべきではないか。これは「教育自由化論」といって、八五年ぐらいからわれわれが提案した議論なのです。

## 5 大学入試と就職

【堺屋】 欠点も長所もない「まん丸人間」をつくってペーパーテストで選抜すると、どの高等学校に偏差値の高い子がいるか、どの高等学校から、どの大学に優等生が行くかわかります。だから大学にもヒエラルヒー(階層構造)ができてしまっただけです。そうすると無限に受験競争が激しくなる。そのなかでどういう人が合格するかというと、共通の技能と知識があって、個性と獨創性のない人です。

いちばんそういうところで鍛練された受験エリートが今度は官庁へ行く(笑)。そうすると官庁でも個性と獨創性のない人がいいということになって出世して行く。そして、次の後輩の評価をするのにも同じ繰り返しをするから、一九九〇年ぐらいになりますと抜けたたいヒエラルヒーができてしまっただけです。世間もそれに慣れ親しんだから、むずかしい試験に通った人だよという安心するけれど、選挙に通った人では安心しない(笑)。

【佐々木】 一九六〇年ころの時代と比べて、たとえば八〇年ぐらいになってくると、それ自体、社会もずいぶん変化しました。人材の蒸留水をさらに蒸留したようなものを累積していくようなシステム、これはある時期以降の産物だろう、と私は思うのですが・・・

【堺屋】 だいたい六〇年頃、高度成長とともに始まったのではないのでしょうか。

【佐々木】 そうですか・・・

【堺屋】 だから五五年以降に大学に入った人たちが上へ行った八〇年ぐらい、これからいわゆる純粋培養人間が起こったのではないですか。

【佐々木】 なるほど。われわれも大学のことを考えますと、いまのご指摘にはいちいち耳の痛い話もたくさんあるのですが、耳が痛いという以上に、ある種、これ自体が社会の最大のシステム、とくに受験は社会の最大のシステムみたくになってしまいました。果たしてこれは学力向上のための制度なのか、それとも社会秩序を維持するための制度なのか、当事者もわからなくなってきた時代がずいぶん長く続いてきてしまっただけです。

【佐々木】 昨今も一部の国立大学において入試事務のミスがありまして、ああいう事態への反応をみてみますと、ああいうことがあってはいけないとは思いますが。しかし、まだ「入るとき」のことにみんな大変な関心をも

っている。

その裏を返しますと、これは非常に興味あることですが、けれども、日本の場合は新卒というものがじつに寛大に企業等に受け入れられてきたと思います。国際的に比較してみると、ずいぶん日本のユニークなところだったのではないかと。少なくともいろいろな経験なり技能なりを身につけた人を探るといいうのはなく、とにかく新卒がいちばんある意味で就職に有利であるということ、それがあつた種の常識になっていますが、それとたぶん入試の問題は裏表の関係になっていまして、ああいう新卒が、毎年毎年大量に組織に、むしろ非常にいいものとしてどんどん社会に吸収されてきた。あれはいつたという現象と理解すればいいのですか。

【堺屋】 あれは終身雇用と関係がありまして、途中で排除しないということは、途中から入れないということと同意義です。だから新卒を入れて終身雇用としたいのは職場はそうなんですけれども、この仕組みでは課長補佐の最後ぐらいがいちばん企業忠誠心が強くなるようですね。

【佐々木】 そういうものですか・・・

【堺屋】 入った初めは、まだそれほど感じない。だんだん強くなって一五年から二〇年というところがいちばん企業忠誠心が強くなる。役所などは典型的にそれで、それを過ぎるとまた落ちてくる。それが年功賃金と関係がありまして、年功賃金で若い頃は働きのわりにもらっているのが少ない。中高年は働きよりももらっているのが多い。ちょうどクロスする線が四〇代前半らしいですよ。

【佐々木】 なるほど。

【堺屋】 四〇歳までは会社に貸しがあるわけですね。だから、いちばん会社に対する投資量が増えたときに忠誠心が最高になって、それをだんだん取り返して退



職金で最終決済する。このシステムがあるものですか、途中から入れると「会社に貸しの奴に口イヤリテイがあるのか」となる。やっぱり新卒のときから忠誠心のある人をつくろうという発想が新卒有利というこれにつながったのではないですか。

## 6 雇用の変化

**【佐々木】** おそらく戦後日本でこれだけの大学がどうにかやってこれたのは、新卒が優先的に採っていただけというシステムのおかげだったのでないかと思うのです。人材を社会に出す側から言いますと、大学でどういう付加価値をつけるかということについて考えなければいけない。けれども、少なくとも学生のほうも、何か付加価値をつけて私は会社に入る、というよりも、何となく卒業すれば、それでオーケー、よろしい、と。採るほうもまた、あまり妙なことを勉強しなくていいほうがかえっていいよ、という格好で採る。このいわば一種、暗黙のお題目のうえで大学もやってきたのではないか。

ところが、どうも昨今は、そこがそういうふうに変動かないのではないか、という感じが大学の側にも出てきたし、何よりも学生本人たちが、もはやそういう時代ではない、と感じているように見えます。これが果たして大きな社会の転換を示す一つのしるしなのか、このへんも私は非常に興味もっているのですが、どうお感じになりますか。

**【堺屋】** 団塊の世代以来、人口の増減をみていると、ふつうの発想で言くと、団塊の世代が出てきた、団塊のジュニアが出てきた、といった労働力の供給力が増えたときには就職難になって大変だと思っただけですが、現実には大きな塊が出てきた時は需要マーケットのほうに先に広がるんですね。だから団塊の世代が高校、

大学を卒業したときも、団塊ジュニアが大学を卒業したときも必ず好景気なんですよ。

戦後いちばん好景気だったのは六〇年代の後半、団塊の世代が高校、大学を出たとき、九〇年代に唯一好景気だったのは九五〜六年、団塊ジュニアが大学を出たときなんですね。こんなに大勢出たら就職難になるだろうと思っていたら、必ず好景気で救われる仕掛けになっているのです。

いま、とくにここ数年、急速に変わりましたのは、まず第一に終身雇用・年功賃金がなくなったこと。

二番目は、若い人が急速に減りだした。だから就職を求める人も少なく、マーケットの拡大も少なく、採用者も少ない。

第三の問題として、将来に対して終身雇用で最後までいくと思わない人が増えてきた。いままでは会社のほうが「終身雇用はできないよ」と言っていたのです。だから会社のほうは、全員が終身雇用希望者だ、その中でいいのだけを残してやろう、とだめな人は排除していけばいい、と思っていたのだけれど、いまになると、入って来るほうが「もうけっこうです」と(笑)。会社が望む人が残るとは限らない時代になってきたわけですね。そういう社会の変化と教育の変化というのは、これはどちらかというと社会の変化が先行しているのではないかという気がしますね。

## 7 「永遠なる組織」の終焉

**【佐々木】** そうですね。ほかのいろいろな原因もありまして、大学という世界自体が、最近、非常に厳しくなっている。ひとつには、まず大学に入ってくる人口の減少という意味で、いわば構造不況業種とは言わな

いですが、非常に厳しくなっている。それから、今度は、社会に出てゆくほうが、先に申

し上げたような具合で、もちろんまだ新卒は歓迎されているかもしれないけど、昔のような状況でもなし、受け入れ側のキャパシティそのものもそんなに潤沢ではなくなってきた。そういう意味で入る方と出る方と双方でいわば両方から締められているような感じが出てまいりました。そういうことが背景にあつて、

じつはこの数年、大学もいろいろなことをやり始めています。その一つは、ただ送り出すだけでなく、それなりに付加価値をもつと今までよりつけること。つまり大学を出た後で役に立つような装いをもつと増やさない、入って来る人がいなくなってしまう。とくに中間管理職のホワイトカラーのようなものは、おそらく減ることはあっても増えることはないだろう。とくに法学部、経済学部、商学部、こういうところはみんなそういう問題を抱えているわけですね。いま、みんないろいろな努力をされているところだと思います。

そこで、これは堺屋さんの「知価社会」というお話とも関係してきますが、要するに個人と組織との関係が変わってきた。いままでであれば、とにかく組織があつて、個人の出入りはあるのだけれど、組織は永遠に存続する。しかし、どうもそろそろかなり怪しくなってきたという面ももちろんあるのですが、やはり人間の個人の能力というものもつ意味が、たとえば経済活動においても大きくなり、簡単に誰かほかの人に代えることはできないというような世界が来ているのかもしれない。そのようなことを含め、先ほど大学も従来以上に付加価値をつけるということを言いましたが、個人の能力という問題に対して非常にスポットがあた

るようになってきた。たとえば旧来の企業がそういうことをしっかりとみて人を探っているかどうか、私は存じませんが、少なくとも若い人たちの目からみれば、明らかにいままでの古い企業永遠主義みたいなものは相当に違和感

がある。官庁に対してさえ違和感があるというようなかたちになってまいりました。

そこで、われわれ大学としても、どういうふうに変化、学生の変化と大学のあり方を、一気にはいきませんけれども、何かつないでいくということとはできないものかということ、いまみんな関係者は考えているのですよね。そのへん、どんな感じを持っておられますか。

**【堺屋】** われわれ昭和前半生まれの者は、長嶋選手が現役を引退するとき、「巨人軍は永遠です」と言ったのに喝采した(笑)。組織は永遠ですと言われて安心したわけですよ。

**【佐々木】** なるほど！

**【堺屋】** だからうつろいやすいプロ野球の世界にも永遠なる組織があることをやった世代なんです。その永遠なる組織に、永遠なる就職をする。終身雇用だから最初の二〜三年は訓練をする。だから大学は実社会のことを教えてくれなくても会社に入ってから教えるよというわけですから、あと何十年か働いてくれないとできないシステムなんです。即戦力を大学が供給することになっていない。たとえば官庁に入りますと、経済学部卒の人と法学部卒の人と教養学部卒の人とみんな同じ人事をやるのですよ。法制局長官になった人でも経済学部卒業者が二人ぐらいいますね(笑)。つまり、職場へ入ってから訓練するものだ、こういう発想です。医学部と弁護士はインターンをやるんですが、だいたい文系の経済、法律、経営、商学部なんているのは汎用的教養だけでよいというわけです。

ところが、これからどれだけそれを専門教育、即戦力に大学がしていく必要があるのか。即戦力になったというしは何かの資格を取るべきなのか、そういうところがあるいは何かの資格を取るべきなのか、そういうところ

ろがこれからの大学教育のなかで、教授が推薦すれば信頼が得られるようにするのか、各大学ごとにランクをつけて、うちのA級の選手ならだいたいようぶですよというふうなかたちになるのか、あるいは世間の評判がおのずから、労働力マーケットが決めるようになるのか。そして、それに対して受験生がどう反応するかですね。

**【佐々木】** まったくそのとおりです。

**【堺屋】** これもまた大きな問題だと思っておりますけれども、いまはだんだん少子化の影響で、大学が選ばれた時代になってきたものから、やがて大学のほうでも、うちはこういうような特徴でいきます、ということになるでしょう。戦前はまた帝国大学と高商、高校それぞれ特色があつて売り物があつたのですけれども、そういうかたちに戻るのが。これからの多様な社会にどういう生き方をするかというのは大変重要な問題だと思えますね。

## 8 大学の知的生産への期待

**【堺屋】** もう一つ、研究機関としての大学。これもまた非常な転機にきていると思えます。二〇世紀はほとんどの知識人が大学から出ているのです。有名な哲学者、科学者をみるとほとんど大学に関係している。おそらく二〇世紀の有名な学者というが、哲学、経済学、法学などで大学に関係したことのないのはバートランド・ラッセルとケインズとサルトルぐらいですか、あとは全部どこかで大学と関係している。一九世紀をみますと、大学に関係していない人のほうが多いのですよ。

**【佐々木】** ドイツ以外はいないですね。

**【堺屋】** フォイエルバッハなんていうのは、単なる講演業者ですし、ニーチェもちょっと大学にいたけど短期

間でした。あとはマルクスとかカードとかダーウィンとか、ああいう人たちはみんな大学に関係しないのです。だから知的生産が大学に集中したというのは二〇世紀の一つの特徴なのですが、最近になってシンクタンクとかそういうような機関が出てきて、大学でない知的生産のグループが出てきた。こういったもの、大学のあり方、これがどんな関係になっていくかが非常に興味深い問題ですね。

**【佐々木】** なるほど。いま、ご存じのように、大学改革問題が日本でも大変盛んになっておりまして、この点について、またいろいろお話しを伺いたいと思うのですが、一つ私たちが痛感しますのは、突然大学の役割が大きく浮上してきたことです。いままでは「何も教えないほうがいい」と言っていたところが、「いや、そうではない」ということに突然変わる。このころは、やれ「大学発の企業を興せ」とか、場合によっては「再就職希望者の再訓練もやれ」とか。また他方では、ご案内のように、とくに自然科学の領域では非常に国際的な研究面でのコンペティションがきつもの、すなわち、ものすごい資源の投入をやることによって、初めて国際的にある位置を維持できる、といったようなことがございまして、いろいろなご要望、ご期待、時には迷惑なものを含めて一挙にいま押し寄せてきています。私はそこで一つ疑問なのは、たとえばベンチャーにしても、大学ではなくて、まず第一義的には会社から出るべきはずなのが、それはいついとうしたのかと・・・それはまさに単純な疑問かもしれませんが、そういうことも含めて、まさに堺屋さんがおっしゃっている変化が社会的にうまくいかず、それが大学にも、応分のコストや責任を果たせ、というかたちで一気にか押し寄せて来ている、というのがわれわれの解釈なのです。大学としても、いわゆる受験と卒業の体制から、今度はベンチャーの創出まで方向を変える、なんてい



う話になりますと、これはなかなか正直言ってみずかしい。大学というものはあまりヒエラルヒーのない組織です。結局皆さんいろいろなところでいろいろなことをやっておられます。それと課長とか課長補佐とかそういう細かい階層がございまして、教授、助教が、おのおの独立して存在している組織の形態があるわけです。確かに講座制が閉鎖的だという批判はありますが、組織全体としてみると非常に柔軟な組織ではないか。そしてまた、いろいろなかたちで閉鎖性があるように見えるけれど、しかももともと体質としては、簡単につぶすことは出来ないようなところもある、さればといって、軍隊みたいにがちがちに固くなった組織では全くない。

そういう意味で、社会の変革期に、大学はある種の「緩衝地帯」の役割を果たすのではなからうか？あるいは、人が一度そこで実力を蓄えて、また出かけていく。言葉は悪いかもしれないけれども、そういう「緩衝地帯」としての役割がずいぶんあるのではないかと、いうことを、この数年折に触れて考えてきました。それが果たして、先ほど申し上げましたいろいろな社会のご要望とつながるかどうか、私もまだ確信は持てないのですが、ほかの組織との違いみたいなものの結果、うまく大学が社会のお役に立てば、これは一つの行き方ではないだろうかと思うのです。

ただ、実際にはもつと性急な話ばかり来るのです。そのこととおそらく関係しているのですけれども、学部から大学院へシフトが始まっています。東京大学の場合とくにそれは著しいですね。おそらくこれも、堺屋さんがおっしゃる「知価社会」への転換と、どこかでつながっているのではないかと。このあたりについて何かお考えがあればお願いします。

**【堺屋】** 日本の大学は明治以来、欧米文化を伝達するという、どちらかというと教育機関に重点を置いた

大学で来たわけですが、ここへ来て、伝達機能だけではないかということになると、大学はおっしゃるように柔軟な組織だから、何でもいちはんできるのではないかと期待があるのですね。しかも知的生産を独占してきたものから、大学に頼めば何でもできるだろうというような期待が世間にあります。たとえばこれを財団法人〇〇とか特殊法人〇〇をつくってとか、あるいは都道府県とか官庁がそのままやるといったら、たちまち抵抗が起こるところ、大学に任せますというといちはん社会に受け入れられやすい。

**【佐々木】** そういうものですか・・・(笑)。

**【堺屋】** それが一つにはあると思うのです。大学の側から言うと、それは過剰期待であるのか、あるいは本職でないことを言われるので面倒くさいところもある。いろいろな問題が全部日本の知的な期待が大学にかかっているのではないかと気がするのです。その大学の中でも、短大、教育機関に徹した大学と、そういういろいろな機能が期待されている大学と、期待されていないけど、やりたい大学と、期待されて、やりたくない大学と四種類があるような気がしますが、これも(笑)、こういうことが大学に期待されだしたということは、大学という組織もそうですけれども、大学人がもつと外と激しく交流してほしい。

私が経済企画庁長官をしておりました昨年、東京大学から何人か人を頂いたわけですね。これは非常にめずらしいことで、たいしては大学の先生は審議会に出ても職員にはならなかったのですけれども、今後そういう大学がおっしゃるように、一時の知的充電の基地になって、そしてまた、より高い労働力となって生産的に出ていくというような繰り返しがあれば非常にいいことだとは思っています。ただ、大学という組織の管理からみるとけっこう面倒くさいことが多いと思います。



## 9 大学と社会の関わり

【佐々木】 私も総長になってから、何件かそういうことを見聞きしておりまして、これは大変大学にとってもありがたいことだと思えます。

それから、産業界との関係につきましても、じつはこのごろ経済産業省からだいぶ積極的なアプローチがありまして、いろいろな話が来ています。一方に「平沼プラン」があれば片や「遠山プラン」あり、とか、いろいろございます。実はこういう問題についても、大学としてできることはしたほうがいいでしょうということ、いまそういう社会との連携をどうするか、早急に検討しているところです。学内の話を聞くと、学生も先ほど言ったような次第で、一つの組織に属して一生を安穩に送れるとは、もはや考えない、そういう選択をする学生が出てきている。東大の場合、そういう学生は比較的、数は少ないのかもしれないですが、確かに出てき始めている。

それで、いろいろなかたちで、従来よりは複線的な職業選択なり経済活動なりに対する態度がいま出てきている。私はこのこと自体は大変結構な一つの転換期を象徴する出来事ではないかと思っております。

ただ、そうしますと、結局大学のなかのメンバーの取り扱い、ハンドリングは一律的にはいかなくなる。たとえば、守っていただかなければならぬルールも若干複線的に整備しなければいけない、など、いろいろな問題が、それに関連して起こってくる。ということ、このへんが大学としては避けて通れないテーマです。

世界中の大学の学長たちと話しますと、大学をいろいろな意味で上手に使わないと、社会全体が大きな障害に遭遇する、あるいはうまくいかない、端的に言えば経済面ですら、うまくいかない問題にぶつかるのだ、

ということを言われているものですから、その点は確かにシリウスに受け止めなければならぬと思っております。

堺屋さんも新聞等で、国立大学を合併させる話とか、三〇校を世界水準の大学にするために資源を集める話とかいろいろご存じかと思えます。そのへんについては、どのような印象をおもちですか。

【堺屋】 まず三〇校の話ですね。これはだれが選ぶのかというのがいちばん気になるのですね。それで一人選んだらずつとそのまま続くのか、一部、二部入れ替え制のJリーグみたいなになるのか、入れ替えるのはだれが選ぶのか。いままではだれが選んでいたかという受験生ですね。いちばん優秀な受験生の集まる場所は一流大学だと。受験だけで選ぶものから、社会の評価もそこで、卒業生の評価でなしに入学生の評価だということになっているところが問題だと言われてきたのですけれども、消費者が選ぶ制度というのは私はいと思うのですよ。

その意味では、入学試験かどうかは別として、たくさん入れて少し出すというアメリカ式の方式のほうがいいのかというような気はしています。だから、文部官僚なり何なりが三〇校選ぶというのはちょっと不適当な話ではないか。それを梃子にして、またいろいろな統制が強まるのではないかと気がするのですね。

## 10 「法人化」

【堺屋】 もう一つ、大学を独立法人にしようという話が出ておりますけれども、これは私はうまく機能すれば非常にいいことだと思っております。うまく機能するためには、各大学の事務ハンドリングがどんな人たちによって行われるのが重要。大学教育者として優秀な人、研究者として優秀な人が大学経営者として

優秀だとはかぎりませんが、大学経営専門の人が出てくるのかなという気がするんですね。いま、日本には大学教育専門家として成功した事例はありますが、そのために育成されている人々というのはいないわけですね。そうすると何となく官僚天下りになったり、そこにまたいろいろな問題が出てくるかもしれないという気がするので。

大学がいちばん目覚ましいのは、大学が各学部ごとに個性をもって目玉商品がつけられる状態がいいと思うのですね。それにはどういふかたちがいいのだろうか。とくに国公立と私立との関係が、私学補助金など出たが近づいておるようではありますけれども、これはそれぞれの建学の精神から違ったものでした。これは大切にしていきたいと思えますし、地域社会への貢献などもやはり無視できない問題だと思っております。だから大学がどんどん分化していく。たとえば金融機関では二〇いくつもの銀行が為替をやっていたのが、いま為替取引をする全国銀行と地域銀行とに分化している。これと同じように、大学のなかにも国際的に活躍する大学、全国的に人材を供給する大学、地域の人々を大切にする大学というようなものが整理されてきていいのではないかと思っております。

## 11 大学をマネージメントする

【佐々木】 なるほど。とくにマネージメントを担当する人材の問題は大問題です。たとえば学外から人材を入れなさいというようなことが言われますが、具体的に問題を考えてみても、いったいどこに、そういう人材がおられるのだろうか、と考えますと、これはなかなか一筋縄ではいかない問題です。そういう意味でのマネージメントの体制一つとりまして、でき上がった後ももちろん問題ですが、移行期をどうするのか

というのも、なかなかの難問です。このへんなど、じつは考えあぐねながら毎日やっているのです。ただ、必要はすべてを生み出すということもございますから、何とかなるかなと、いう感じもしているのですけれど。

**【堺屋】** 大学でも特殊法人でも、そのマネージメントにあたった人がどれほどの名誉と報酬を得られるか。自分で企業経営した人は、だいたい自分でプランを立てて、得べき報酬と名誉を計算するわけですね。ところが大学を建学した人は、福沢諭吉でも新島襄でも大変広宣を使われた。ここでマネージメントを引き受けた人が、果たしてそういう努力と才能にふさわしいだけの名誉と報酬が得られるか。とくに名誉ですね。

**【佐々木】** 名誉ですか、どういう？(笑)。

**【堺屋】** 福沢諭吉は自分でも学者だったわけですが、主としてマネージメントとしてあの慶應義塾をおつくりになったというところで知られているわけですよ。だから、マネージメントをする人が相当の地位と名誉がないといけないだろうけれども、そんな人が急にみつかるとか(笑)。

**【佐々木】** おっしゃるとおりだと思います。

**【堺屋】** どのだれと言われると、これまたむずかしい問題で、大企業を成功させた人がすぐ来てくれるかどうか、とかね。

**【佐々木】** そうなんですよ。やつぱり大学という組織は企業とまた違った「リソースをたくさん持っている」から、同じようなわけにももちろん行かないと思います。しかし、いずれにせよ、おっしゃるのように、まさに建学の大有名人がいる場合でも、その後の再生産のメカニズムというのはなかなか大変です。とくに国立大学におきましては、誰かが代わりにやってきたところもあるものですから。しかし、おそらく近々そういったことについてもいろいろ踏み込んで考えてやっていく

必要が出てくるのでしょうか。

それも、「大学だけを変える」というのでなくて、社会全体が変わるといふなかで大学も変わる、というのであれば、ある意味でやりやすい面もあるのかなと思います。そのようなことで、少し希望をつないではおるのですが、またアドバイスをいろいろお願いしたいと思います。

## 12 近未来の大学像は？

**【堺屋】** この世の中全体が知恵の値打ちの時代になってくる。知恵の値打ちというのは、学歴にも職業にも人種にも関係なしに出てくるわけですね。だから、音楽大学を出た人が新しい音楽を開発したかという、じつはビートルズがリバプールの下町から出てきて大革命が起こった。芸術大学を出た人じゃなしにマリー・クワントがファッション大革命を起こした。

おそらく二一世紀には、大学を刺激するような知的提案がかなり盛んになって、そしていま安藤忠雄さんなどはそうですけれども、大学でない人が大学へ入ってきて、というような形で、知的生産のほうでは非常に活発になると思うのです。

マネージメントのほうは、また別に考えないと、従来の国立大学は学者として偉い人が総長になられて、マネージメントで偉い人が総長になるとはかぎらなかつたわけですね。だから、この経営と研究教育との分離というのが、これから独立法人になってくると重要になってくるのでしようね。

**【佐々木】** そうだと思えますね。そういう意味で機能の、いわば一種の「仕分け」みたいなものを、いま本当はやらなくてはいけないと思います。

**【堺屋】** また、学生さんも大学のうちに即戦力になるような、自分の選んだ道で技術・技能を身につけて

卒業するということが大事になってくるのでしょうかね。

**【佐々木】** 私の出身学部に近い話題では、今度は法科大学院というものができるといふ流れになっていますが、これはおそらく文科系の従来のイメージにとつてはかなり大きな修正を迫る転機になるのではないかと思っています。

**【堺屋】** お医者さんにはそれに似た制度があつて、医学部を出たらだいたい国家試験には通つて、そして国家試験を通つたら社会的な信頼があつた。法学部の場合には、法律学部を出ても司法試験に通る人はわずかで、司法試験自身が権威だったのですよね。ところが法科大学院がそういう権威を継承する。そうすると大平光代<sup>(4)</sup>さんみたいな人はどうするのか、という問題が起きますけれどもね。

<sup>(4)</sup>大平光代 弁護士。子供時代には「いじめ」の経験で自殺をこころみたことも。結婚後さまざまな境遇を経て、司法試験に合格。現在は法曹界で活躍している。著書に「だからあなたも生き抜いて」(講談社)など。

**【佐々木】** もちろんそれは出てきます。

**【堺屋】** 起りますけれどもね。数を増やししながら質を落とさないとというのは大変むずかしいことでしょうね。

**【佐々木】** しかし、いまは数も少ないし、その上質の方も向上させてくれ、という要求が出て来ますものですから・・・もつとそれをさかのぼっていきますと、きょうは議論出来ないのですが、「学力問題」というのがございます。それは大学としても、ただ受験生を待つているだけではなくて、かさ上げのためにいろいろ努力をしなくてはいけない、など、さまざまな問題がまだほかにもございますが・・・きょうはこのへんところで、どうもありがとうございました。

(二〇〇一年七月二二日、東京大学・懐徳館にて)

# 21世紀の東京大学

## ・・・多様性・国際性・開かれた知の拠点

大学。かつて人類が産みだした、もっとも高度な知の組織体が、時代の要請に従って、いま大きく変わりつつあります。新しい世紀、新しいミレニアムに、世界と大学はどのような変貌を遂げてゆくのでしょうか。その全容は計り知れず多様です。私たちが実際に迎えた21世紀は、20世紀の間に夢見られた未来像とは大きくかけはなれ、人類はさまざまな問題に直面しています。それら「多様な」社会のニーズに応えるべく、専門領域をこえたさまざまな知を動員して、大学はかつてない複雑なアウトプット群を産みだすことを求められています。グローバリゼーション後の世界が、「多様性」と「国際性」に開かれた新しい知の拠点としての役割を、大学に期待しているのです。

東京大学は「21世紀の問い」にいかにか答えてゆくのか?本特集では、まずは世界や日本の歴史の流れの中における東京大学の変遷を見極め、2001年における現状を把握し、そして部局長たちの語るさまざまな将来構想の中から「開かれた知の拠点」としての東京大学の未来を展望してみたいとおもいます。



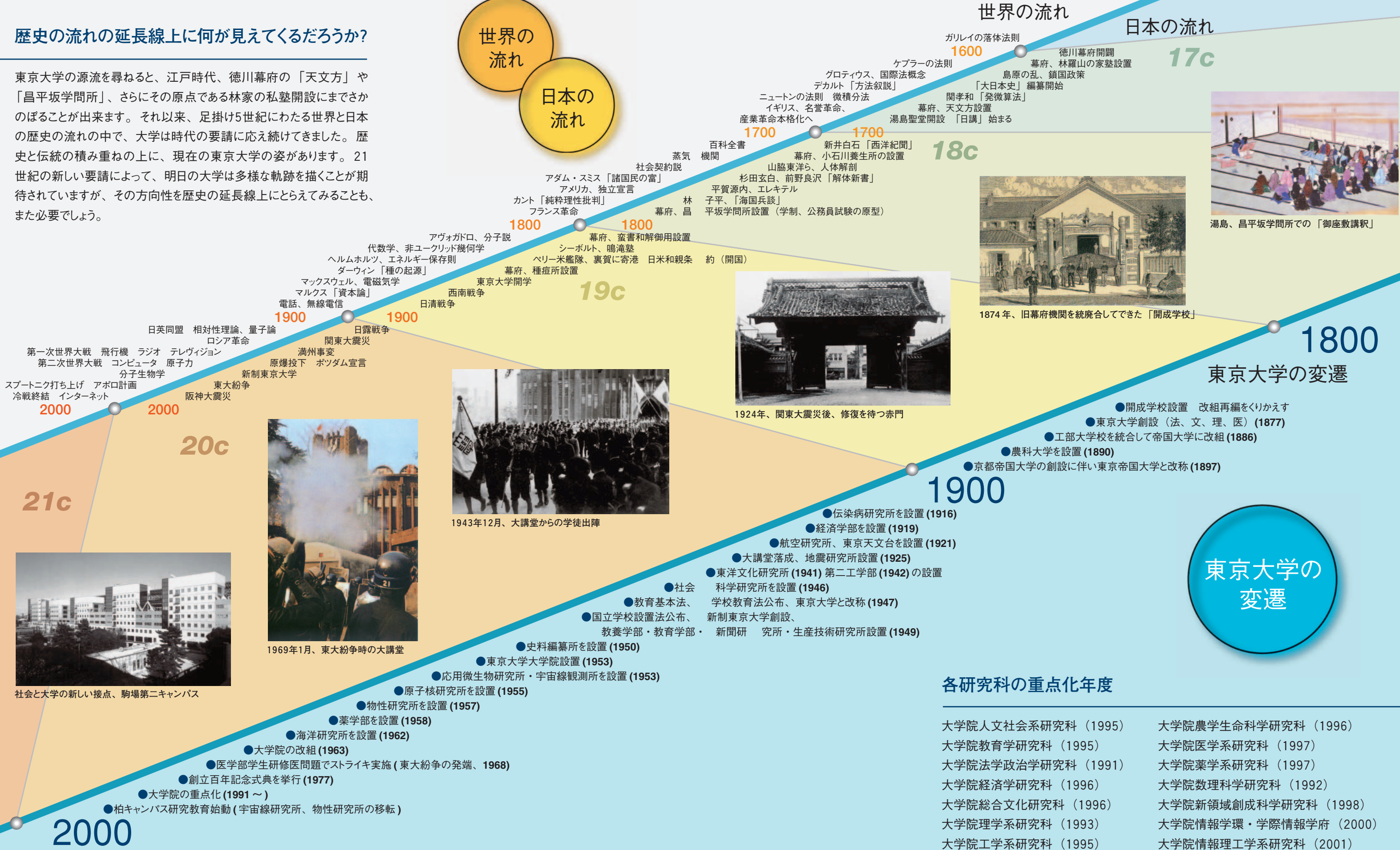
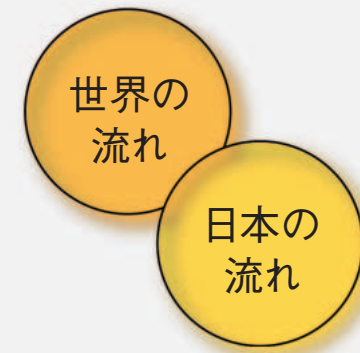
21世紀の夜明けをライトアップで迎える  
東京大学大講堂 2001年1月1日



新しい時代を切り開くため、「学融合」の役割を担い建設が進められる東京大学柏キャンパス

歴史の流れの延長線上に何が見えてくるだろうか？

東京大学の源流を尋ねると、江戸時代、徳川幕府の「天文方」や「昌平坂学問所」、さらにその原点である林家の私塾開設にまでさかのぼることが出来ます。それ以来、足掛け5世紀にわたる世界と日本の歴史の流れの中で、大学は時代の要請に応え続けてきました。歴史と伝統の積み重ねの上に、現在の東京大学の姿があります。21世紀の新しい要請によって、明日の大学は多様な軌跡を描くことが期待されていますが、その方向性を歴史の延長線上にとらえてみることも、また必要でしょう。

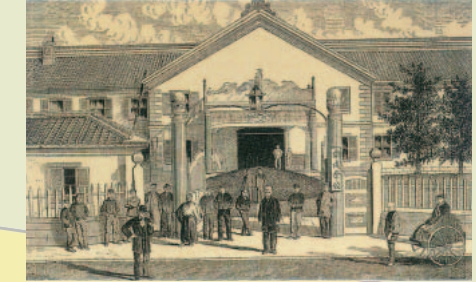


世界の流れ

日本の流れ



湯島、昌平坂学問所での「御座敷講釈」



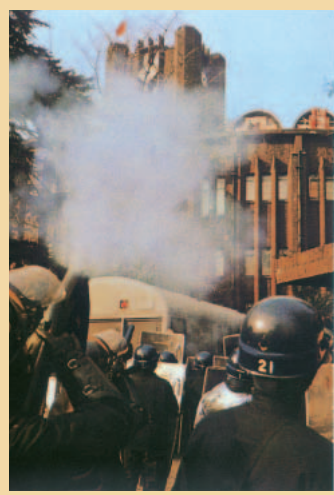
1874年、旧幕府機関を統廃合してできた「開成学校」



1924年、関東大震災後、修復を待つ赤門



1943年12月、大講堂からの学徒出陣



1969年1月、東大紛争時の大講堂



社会と大学の新しい接点、駒場第二キャンパス

東京大学の  
変遷

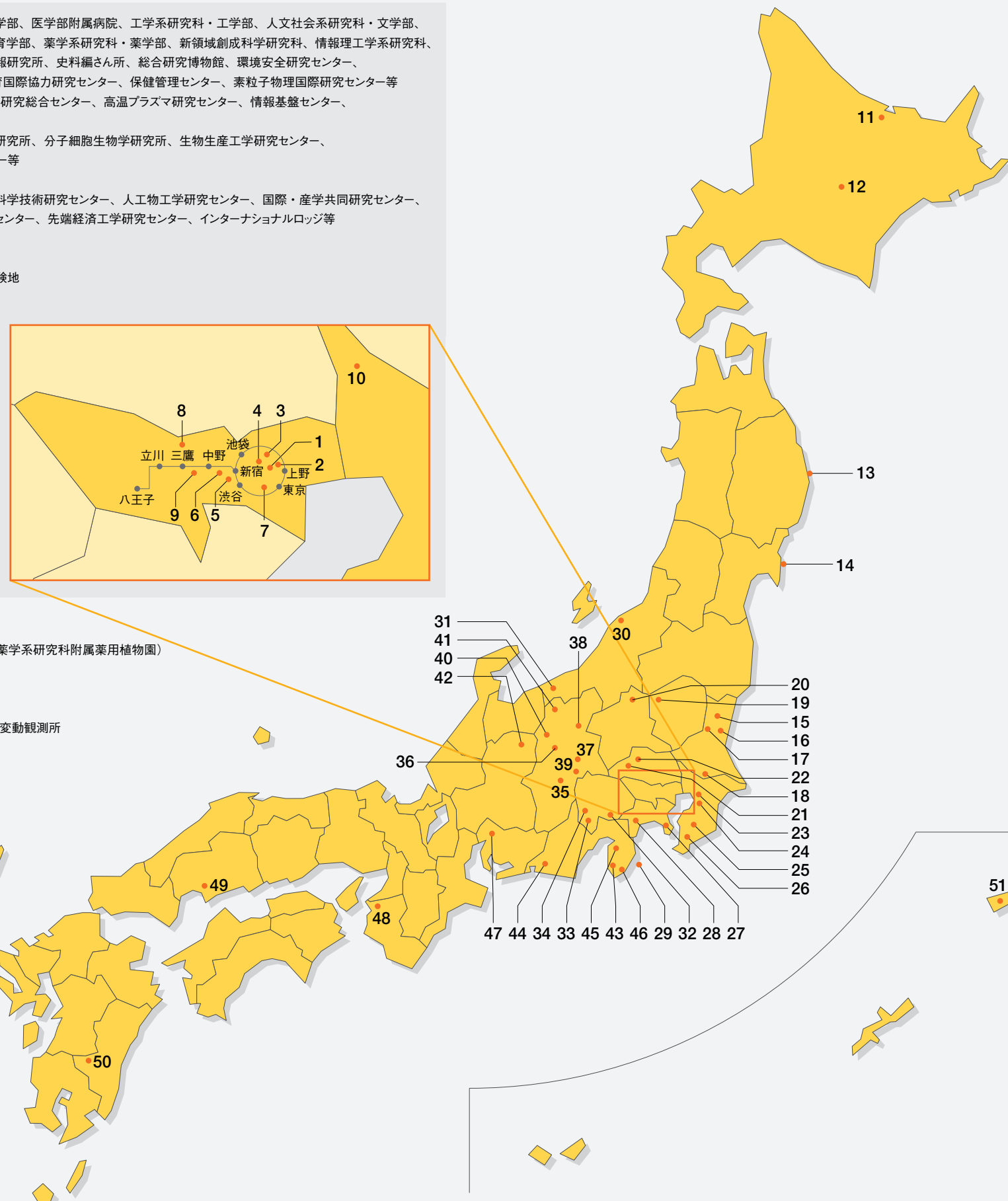
各研究科の重点化年度

- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 大学院人文社会系研究科 (1995) | 大学院農学生命科学研究科 (1996)   |
| 大学院教育学研究科 (1995)   | 大学院医学系研究科 (1997)      |
| 大学院法学政治学研究科 (1991) | 大学院薬学系研究科 (1997)      |
| 大学院経済学研究科 (1996)   | 大学院数理科学研究科 (1992)     |
| 大学院総合文化研究科 (1996)  | 大学院新領域創成科学研究科 (1998)  |
| 大学院理学系研究科 (1993)   | 大学院情報学環・学際情報学府 (2000) |
| 大学院工学系研究科 (1995)   | 大学院情報理工学系研究科 (2001)   |

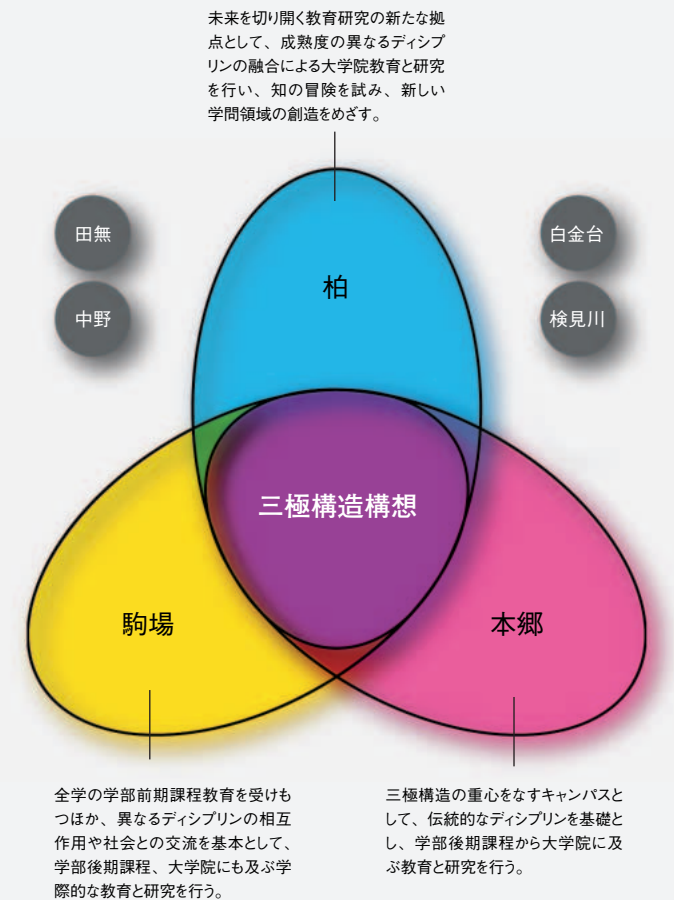
2000

- 1 本郷地区 事務局、附属図書館、法学政治学研究所・法学部、医学系研究科・医学部、医学部附属病院、工学系研究科・工学部、人文社会系研究科・文学部、理学系研究科・理学部、経済学研究所・経済学部、教育学研究科・教育学部、薬学系研究科・薬学部、新領域創成科学研究科、情報理工学系研究科、情報学環・学際情報学府、東洋文化研究所、社会科学研究所、社会情報研究所、史料編さん所、総合研究博物館、環境安全研究センター、遺伝子実験施設、留学生センター、大学総合教育研究センター、医学教育国際協力研究センター、保健管理センター、素粒子物理国際研究センター等
- 2 浅野地区 工学部附属総合試験所、低温センター、アイソトープ総合センター、原子力研究総合センター、高温プラズマ研究センター、情報基盤センター、大規模集積システム設計教育研究センター等
- 3 弥生地区 農学生命科学研究科・農学部、農学生命科学研究科附属演習林、地震研究所、分子細胞生物学研究所、生物生産工学研究センター、アジア生物資源環境研究センター、インテリジェント・モデリング・ラボラトリー等
- 4 小石川地区 旧医学部附属病院分院、理学系研究科附属植物園等
- 5 駒場地区 総合文化研究科・教養学部、数理学研究科、生産技術研究所、先端科学技術研究センター、人工物工学研究センター、国際・産学共同研究センター、気候システム研究センター、駒場オープンラボラトリー、空間情報科学研究センター、先端経済工学研究センター、インターナショナルロジ等
- 6 中野地区 教育学部附属中等教育学校、海洋研究所
- 7 白金地区 医学研究所、同附属病院、インターナショナルロジ等
- 8 田無地区 農学生命科学研究科附属農場、農学生命科学研究科附属演習林田無試験地
- 9 三鷹地区 理学系研究科附属天文学教育研究センター等
- 10 柏キャンパス

- 11 人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 12 農学生命科学研究科附属北海道演習林
- 13 海洋研究所附属大榎臨海研究センター
- 14 地震研究所附属江の島津波観測所
- 15 工学系研究科附属原子力工学研究施設、物性研究所附属中性子散乱研究施設
- 16 農学生命科学研究科附属農場
- 17 農学部放射線育種共同利用施設
- 18 地震研究所附属地震地殻変動観測センター筑波地震観測所
- 19 理学系研究科附属植物園日光分園
- 20 谷川寮
- 21 農学生命科学研究科附属秩父演習林
- 22 地震研究所附属地震地殻変動観測センター堂平観測所
- 23 検見川地区（検見川地区総合運動場、農学生命科学研究科附属緑地植物実験所、薬学系研究科附属薬用植物園）
- 24 生産技術研究所附属千葉実験所
- 25 農学生命科学研究科附属千葉演習林
- 26 地震研究所附属地震地殻変動観測センター鋸山地殻変動観測所
- 27 理学系研究科附属臨海実験所、地震研究所附属地震地殻変動観測センター油壺地殻変動観測所
- 28 農学生命科学研究科附属農場二宮果樹園
- 29 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター伊豆大島火山観測所
- 30 地震研究所附属地震地殻変動観測センター弥彦地殻変動観測所
- 31 池の平寮
- 32 農学生命科学研究科附属富士演習林、山中寮
- 33 地震研究所附属地震地殻変動観測センター富士川地殻変動観測所
- 34 宇宙線研究所附属明野観測所
- 35 理学系研究科附属天文学教育研究センター木曾観測所
- 36 地震研究所附属地震地殻変動観測センター信越地震観測所
- 37 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター浅間火山観測所
- 38 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター小諸火山化学研究施設
- 39 地震研究所附属八ヶ岳地球電磁気観測所
- 40 宇宙線研究所附属乗鞍観測所、同鈴蘭連絡所
- 41 野尻寮
- 42 宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設
- 43 農学生命科学研究科附属演習林樹芸研究所
- 44 農学生命科学研究科附属水産実験所
- 45 戸田寮
- 46 下賀茂寮
- 47 農学生命科学研究科附属愛知演習林
- 48 地震研究所附属地震地殻変動観測センター和歌山地震観測所
- 49 地震研究所附属地震地殻変動観測センター広島地震観測所
- 50 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター霧島火山観測所
- 51 医科学研究所附属奄美病害動物研究施設



東京大学は、本郷、駒場、柏キャンパス三極構造を中心として、未来を切り開く世界の大教育研究拠点として21世紀の要請に応えようとしています。三極構造の重心をなす伝統を担う「本郷キャンパス」、全学の学部前期課程教育を受け持つほか、社会と幅広い交流を基本とする「駒場キャンパス」、知の冒険を試み、新しい学問領域の創造を目指す「柏キャンパス」の三者を中心に、知を創出し、世界の学問研究をリードしてゆきます。



キャンパス三極構造

# 様々な未来像

「多様性」「国際性」。開かれた東京大学の未来はいろいろな横顔をもっています。

さまざまな部局で指導的立場にある八人の東京大学教授に、大学の未来、可能性と展望を語っていただきました。



## 小宮山 宏 教授

大学院工学系研究科長・工学部長

人類の知が直面する本質的困難は、誰にも全体が見えなくなってしまったこと、例えば諫早湾の堰の問題など誰にも全体像が見えません。ところがその原因は、分業という知の発展形式の結果によるものなのです。

▽ 本文へつづく

元来は素晴らしい「分業」による知の発展の結果「問題の複雑化と領域の細分化」が生じたこと、いま必要なのは「知の構造化」です。人間は三次元空間に生きていますから、パラメーターが三つ程度の知識空間なら直感的に理解可能ですが、私たちが直面する複雑な問題には数百ものパラメーターが関わり、各々の専門家がみな別の軸で考えています。数百の異なる視点間に対応がつかない、そうした状態をすっきり整理したい。実は領域の細分化といっても、個々の領域の原理

は意外と簡単で共通する場合も多いのです。その境界を明確化して領域間の関係を明示する「知の構造化」が出来れば、知識はITに実装されます。工学系研究科では「知の構造化・五大プロジェクト」として、学術創成、社会技術、ナノテクノロジー、失敗学、産業技術に関する知の構造化に取り組み始めました。グーテンベルク以来人類を支える活字による方法に加え、真に革命的な知識基盤を生み出す取り組みです。私は学生に「広く学べ」とだけ言うことに反対です。広いだけでは底の浅い評論家です。「深く」「広く」学ぶ必要があります。IT実装された知識基盤が縦横に整備されれば、過剰な情報的大海を「斜め」に深く進んでゆく「知の水先案内」に従って、無用な不安なしに柔軟な学習が可能です。研究者も激しく変動し複雑化する社会や専門領域の中で、自らを明確に位置付けて研究教育を推進できます。大学は問われる前に社会に「発信」し、意志をもって「全体像」を見出し、それを「有言実行」に移して広く社会に問い、柔軟な「知のネットワーク」で答える新たな標準に移ってゆくでしょう。二一世紀の大学は時と空間の制約を超えて人が集い、知が沸騰して様々に構造化する拠点に生まれ変わると思っています。



## 林 良博 教授

大学院農学生命科学研究科長・農学部長

農学に携わる教職員・学生は「生命には必ず始まりと終わりがあること」を知っておりますので、どのように波乱万丈の世紀であろうと、右往左往せず落ち着いた対応を好みます。

▽ 本文へつづく

しかし、落ち着くというのは、蛸壺に閉じこもることではありません。農学は、おなじように「生産」に携って人類に貢献する工学分野の「造る生産」(making)と異なり、「育てる生産」(growing)を担っておりますので、「育つ対象」である生き物の自立性・自主性を無視できません。そのため遅延として発展しない「愚鈍」な学問のように見做されることもありました。しかしこの歩みの遅さのゆえに、本来人類が継承すべきものを二〇世紀に失わずに済んだ

面があり、それが皮肉にも二一世紀に農学が期待される理由の一つかもしれません。トラック競技でいえば、農学は「一周遅れの先頭ランナー」になったということです。これには良い点と問題点があります。良い点は二〇世紀、とくにその後半、自信を喪失していた感のある農学が、セルフ・エスティーム(自尊心)というより「自分もそんなに悪くない」という程度の自尊感情)を取り戻したことです。問題点は、やはり一周遅れですので、全国的な期待に応えられるだけの実力を有しているか、今後問われることになりま。応用科学として実力を淡々と蓄積していくと共に、二〇世紀の科学が成し得なかった、しかし極めて重要な課題である「関係性」と「多様性」について、農学という切り口からの説明が求められます。これは普遍性を追うことのみ汲汲としていた二〇世紀科学を、その呪縛から解き放ち、多様な生き物の個性や地域性に光を当てていくことを意味します。また農学は、ヒトと他の生き物との関係、生き物とそれを取り巻く環境との関係を扱う学問です。この特性を生かし、観察や実験における主体と客体の関係性が根本から問い直されるでしょう。農学は面白くなります。

## Interview &lt;&lt;&lt;

## 鶴尾隆 教授

分子細胞生物学研究所長



大学全体として「生命科学」あるいは「情報科学」など、21世紀の大問題に対して、どのような方向で向かってゆくか、例えば「東大の生命科学」としてどのように各部署が有機的に連携してゆけるか、が問われると思います。

▶ 本文へつづく

分子細胞生物学研究所は「創成」をキ―に「ゲノム以後」の生命科学に取り組みます。農学部、医学部、薬学部など、東京大学の各「学部」組織が科学の基幹部分に責任を持つとするなら、分子細胞生物学研究所は、常に社会動向を念頭に置いて、新しい創造を推進します。学問自体が変わってきているのです。私はがんの研究に携っています。私のがんの研究に携っています。今やがんは怖い病気ではありません。遺伝情報が解りつつあり、むやみに恐れる必要はありません。七〇〜八〇年代にかけての「ゲ

ノム研究」や「バイオ・がん研究」の成果で、九〇年代初に抗がん剤は「がん細胞を殺す薬」から「がん細胞の死の情報スイッチをオンする、あるいは生存情報スイッチをオフするシグナルを送る薬」へと理解が転換しました。この間、分子細胞生物学研究所も、学内外の研究組織、企業と連携して、ゲノム情報に基いた創成研究を指向し続けて来ました。タンパク情報に基づく機能・物質デザインが可能となつて、患者さん一人一人の遺伝情報に基づいてオーダーメイド治療に向かつて着実に進んでいます。脳研究などもゲノム以後大きく変化しています。情報化の進展で、生命科学の先端研究は世界に瞬時に共有化されるようになりました。これは同時に、生命科学が典型的な「分散型研究」であることも意味します。三五、〇〇〇以上ものヒト遺伝子を対象とすれば、研究体制は分散型にならざるを得ません。分散型アドミニストレーションに適した大学の組織作りが大切です。建物だけが必ずしも重要なのではなく、組織体制、教育や入試なども含めたネットワーク化や、きちんとした評価のシステムも重要です。創薬の臨床開発では企業との協力も欠かせません。二一世紀「情報」「生命」「疾病」をキーワードに「応用」「創成」を続けたいと考えています。

## 坂内 正夫 教授

生産技術研究所長



「21世紀の東京大学」は、大学を構成しているおのおのの部署レベルの個性を、より明確化しながら、さらに全体を統合して、いかなる具体的なアウトプットを社会に送り出してゆくかが、一番問われていると思います。

▶ 本文へつづく

このように考えるとき、大学の本質は何か、といった、一見青臭い議論に改めて取り組むことが極めて重要です。即ち「大学は本来、次の世代に残すべき「価値」を創造する義務、世界の「知恵と人材」を作り出す使命を社会に負っている」という理念と使命を再認識して、それに基づく行動が必要になるでしょう。生産技術研究所では、このために、既存分野を挑戦的に融合して、社会への新しい価値創造を行う「ダイナミック融合工学」を、部署としての研究ターゲット

に決めました。この方針に従って「大部門十戦略化機構」など、多くの工夫を凝らして、体制を整えてきました。また一方、教育については、「将来どこかで「花を咲かせる」人材」を基礎から育てる教育、いわば「吉田松陰的教育」、と私は呼んでいるのですが、このような教育の大切さが挙げられます。さらに、これに加えて、社会や産業界に機動的に対応できる「ターゲット型大学院教育」も極めて重要です。生産技術研究所はこの二つを教育の柱として基本に据えて考えています。アメリカ主導によるグローバル化の趨勢にはいろいろな問題があります。そのような趨勢の中で、真に国際的にインパクトのある知的生産物、アウトプットを産み出し続けて行くことを真剣に考えてゆかねばなりません。これらを集約して、二〇〇〇年には「国際総合工学研究所」宣言を行いました（<http://iis.u-tokyo.ac.jp>）。二〇世紀の間は、誰も大学に「国際社会に対して攻撃性のある知」を求めたりはしませんでした。二一世紀の多様なニーズに対して、大学は、シンプルな方向性をもって、明確なターゲット定め、それを一つ一つ落としてゆくことが大切です。それによって、大学が存在している証を立てて行くべきだと思えます。



# 様々な未来像

## 河野通方 教授

大学院新領域創成科学研究科長



大学の未来を考える鍵はスクラップアンドビルド、何をスクラップにして、何を新たに創るか、が問題になります。社会は大学に有形の成果を求めて来ましたが、無形の成果も大切で、それをどう評価するかは極めて重要です。

▶ 本文へつづく

東京大学の入学試験、あるいはより広く大学入試の制度を含め、子供の教育体系全体を見直す上では、拙速に流れることは禁物です。今後、日本が国際社会でどのように生き残っていくか、明治維新以来の「富国強兵」あるいは戦後の「戦争」や、二〇世紀後半の出来事なども、あらためて正面から見直し、今後、未来に向けてどういうものを創ってゆくか考える必要があります。新領域創成科学研究科では研究面では「学融合」、教育面では学部学生を持たない独立研究科として既存学部と研究所とを

結び、運営面では独自の学術経営委員会制度を持つ「開かれた研究科」として、「柏憲法」のもと国の「科学技術基本計画」の全要素に 대응する将来プランを進めています。大学は社会と全面的な対決も辞さずに、本質的な論争、ディベートの場をもつべきです。それが民主主義だと思っています。また地域との協調は重要です。仮に本郷から東大が出てゆくとして、地元からどれほど慰留されるでしょうか？ 柏では地域との密接な協力関係を大切にしています。同時に、国立大学としての東大が首都圏の地域大学化してはいけません。国全体のために必要なものを、本当にゼロから教官と学生と一緒に作り、世に問うべきです。大学はピュア、純粋でありすぎてはいけません。いろいろな考えを持つ人が集まっていなくては、ものを考えるスタミナがなくなってしまう。中国の故事に「食客三千人」とあるように、目の前の目的だけに汲々とするのではなく、多様な考え方の「居候」が緩やかに連携してこそ、強い生命力のある「学融合」の基盤となり得るのです。多彩な能力の研究者が常に流動し、意識ある学生たちが学ぶ環境、そこからこそ、価値構造自体が作り直されてゆく、そういう大学経営が二一世紀には必要になるでしょう。

## 濱田純一 教授

大学院情報学環長・学際情報学府長



「情報学」は「21世紀の人間学」だと思います。東京大学の最大特徴の一つは、それぞれの学問分野での深い実績、いわば縦穴の深さにあります。その深さを横向きにしたらどうなるか、というのが「情報学環」の発想です。

▶ 本文へつづく

基礎となる伝統的な部局の教育研究が非常にしっかりしているのが東大の良さです。様々な学際的組織の試みが難問に直面する中で、今まで東京大学が積み重ねてきたのとは違う形で、異質なカルチャーが相互に結び合って、二一世紀の新しい魅力を生み出せないか。従来の部局の中で、必ずしも各教官が、持てる能力のすべてを発揮出来なかつたかもしれない。旧来「脇にそれた」と見られた力を、大学の総合力の中に活かす場を設けるためには、適切なテーマが必要で、「情報」はその典型で、従来の学問

分野ではカバーしきれなかつた対象に、人々が集い知の実験に参加する。今まで十分に組み込まれてはなかった「アート」「メディア」なども、「抜け落ちてきた部分を拾いあげる」というより、「より幅広く問題を見るとき、今までやってこなかつたことも当然射程に入ってくる」という形で、おのずと取り組む対象になって来たと思います。情報という切り口からは、信号的に要素分解する視点とともに、人間が感覚的に把握し、社会的に行動する対象把握を避けて通れません。情報化による社会変化が安定する時期には、一定の役割を終えることもあるでしょう。しかし二一世紀初頭の今日、情報というテーマのもと、組織の流動性を保って何年間か決めたタイムスパンで新しい研究を立ち上げ、その成果を各部局に帰って頂く場として、情報学環は有効に機能出来ると思います。これは憲法学者としても、個人の私自身の信念でもあるのですが、オーソドックスなもの、それからやや離れたサブカルチャー的なものが適切に組み合わさったとき、最大の力が発揮されるように思います。それを引き出すための適切な形がある中で、多様なものをどうマネージメントしてゆくか、大学のこれからの問われるところだと思います。

## Interview &lt;&lt;&lt;

## 藤田 英典 教授

大学院教育学研究科長・教育学部長



大学の創設期から21世紀の今日にいたるまで、「大学組織」のもつ基本的な使命やアカデミックな倫理はあまり変わっていません。大学は一貫して、高度な専門教育、研究者の養成、研究の推進を3つの柱にしてきました。

□ 本文へつづく

歴史を振り返れば、近代的な大学の起源はヨーロッパの中世に遡ります。このうちイタリアのボローニャ大学などは学生の組合から、フランスのパリ大学やイギリスのオックスフォード大学などは教授の組合がもとになって出来たものです。今日までその基本は大きく変化していません。しかし、二一世紀初頭の今日、とりわけ重要であるのは、大学という組織の教育・研究の形態が変化しているという点でしょう。大学は、社会の中で知の生産を組織し、それを集合体として

遂行してゆく責任を負っています。そこで旧来の「閉じた」システムを「開かれた」システムにして行く必要があるのです。「学生」に関して言えば、これまでのようなフルタイムの学生だけでなく、夜間や社会人などパートタイムの学生にも門戸を拡大し、単位互換など他大学との交流もさらに促進して、国際的な視野から教育の連携推進が求められています。「スタッフ面」も同様で、いわゆるジョイント・アポイントメントの拡大や他の研究教育機関との連携・交流の促進や任期制の拡大など、多様な雇用形態・勤務形態のスタッフが活躍できるようにすることで、さまざまな人材活用の道が開かれます。法学部のビジネススクールセンターなど、ジョブ・ティーチャーによるトレーニング中心のプロフェッショナル・スクール、実践的専門教育の需要が高まり、今後は大学教員のステータスも多様化すると思います。「研究」に関して言うなら、人文社会科学でも欧米の枠組みやシステムに基づいて構築された理論を日本の現状に当てはめる、輸入型研究の時代は一九六〇年代までで終わっています。知のヘゲモニーをめぐる国際競争が激化している知的状況の中で、日本がもっと理論的にも発信し、国際的なアジェンダ設定力を高めて行く必要があると思います。

## 佐藤 慎一 教授

大学院人文社会系研究科長・文学部長



21世紀を迎え、世界、社会が大きく変化してゆく中で、東京大学も時代に沿って、必然的に変わって行かねばならないでしょう。伝統と知の蓄積を持つ文学部・大学院人文社会系研究科もまた、その例外ではありません。

□ 本文へつづく

狭い意味での「伝統」に安住して、時代の要請に従わなければ、人文学全体が崩れて行かざるを得ないとおもいます。これは大雑把な直感ですが、二〇〜三〇%の部分が適切に変わり、残りの七〇〜八〇%でオーソドックスな基礎を守ってゆくことが大切だと思えます。最近では、アメリカの制度に似て、大学四年間を教養教育、専門は大学院から、と見る傾向が強いのですが、私たちは逆に「many Specialization→Late Generalization」(先に専門教育、続いて総合教育を)

を基本に考えています。人文・社会科学では、分野の別によらず、一次資料に直接当たってそれを確かに読み解き、最終的に学術信頼性の高い論文にまとめるための「血の汗を流す」努力が、確かな専門能力を養うと思います。私の専門の中国哲学に近い例を挙げますと、「二十四史」や「四庫全書」など古典的な基礎文献がデータベース化されて、情報技術が研究を大きく推進させました。いまや研究にコンピュータは不可欠です。しかし、検索の結果得られたデータを確かに読み解く専門訓練を経た視点が必要ならば、真に国際発信力ある研究は出来ません。確かな基礎の上に立ちながら、専門の蛸壺化を防止する、専門分野間の交流演習(他分野交流演習)、あるいは理科系の教官・学生との知的交流を促進してゆきたいと思えます。二一世紀の社会は「生命・環境・情報倫理」などの「応用倫理学」をはじめ旧来の「文理」の枠を超えた新たな問題に直面しています。一方で「学力水準の低下」や「教養教育の全体的弱体化」が指摘されるなか、新しい時代の要請に従って柔軟な知を推進するために、私たちは新しい「共通の知の基盤」を作って行かねばなりません。二一世紀の人文学の社会的存在理由はまさにここに示されている、と私は思っています。

## ●生活・人生・生命

人は社会的動物です。無論、これほどの大社会を造らなくても生きてはいけるでしょうが、私たちは、森に戻って熊と共に暮らすことはもはやできません(ルソー『人間不平等起源論』)。しかも、それでいて、私たちの志向・利害は往々対立します。紛争も生じます。それを、可能な限り、暴力ではなく言語によって防止し解決するための工夫、それが法です。そして政治です(しかも「暴力装置」さえ、法と政治なしでは成り立たないのです)。

法学政治学研究科・法学部では、この法と政治とを研究し、教育しています。つまり、立法・行政・司法の全局面について、多角的に研究し、法学的智恵と政治学的識見を深め、それらを身に付けた人々を輩出しようとしています。それは、人間の「命の全て」、即ち生活と人生と生命とに関わる、重大で真剣な営為です。

環境や電子商取引や生命技術に関する適正なルールがなければ、何が起きるかわからない。それにかかわる経済的發展も衰滅してしまふ。人類の将来にも影響する。そのような危機感さえ懷かれてるように、「文明」の最先端にも、これは関わっています。

しかも、法学的智恵と政治学的識見は、法律家・政治家・官僚だけに有用なものではありません。およそ組織を運営し、経営し指導していくには必須です。それが、法学・政治学を学んだ人が、世界中で、経済を含むあらゆる分野の指導的役割を果たしている理由でしょう。我々は、今後、そのような無くてはならない人々を供給する役割を果たしていこうと決意しています。

## ●理論・歴史・実務

法と政治の性質からして、現代日本の事実・現実のみを見ては、よく解りません。現行法の規定も、時には古代ローマに由来します。明治時代に西洋の法を継受しつつ制

## 教育・研究の現場から

### 大学院法学政治学研究科・法学部 Graduate School of Law and Politics and Faculty of Law

渡辺 浩 大学院法学政治学研究科長・法学部長

Home Page : <http://www.j.u-tokyo.ac.jp/>

人が大規模な社会を構成して生きていく以上、法と政治は欠かせません。  
それは、我々の生活・人生・生命にかかわります。

法学的智恵と政治学的識見をさらに深めていくこと、それらを身に付けた人々を輩出すること——日本と世界の未来のために、それを目指しています。



定されて、今も有効な重要な法律もありません。人類の膨大な歴史の深みの上に、今の法体系があり、政治と行政が成立しているのです。それ故、法学・政治学は、実務的であるためにも、歴史的であることを要します。現実的であるためにも、思想的・哲学的、そして理論的であることを要します。日本を理解するためにも、外国を理解することが必須です。そして、それが人生の全局面にかかわる以上、学際的であることが、その本質です。

## ●研究・教育・改革

法学政治学研究科・法学部では、そのような研究をしています。世界屈指の法学政治学の専門図書館が中核となってそれを支えています。さらに、明治新聞雑誌文庫と原資料部とを擁する近代日本法政史料センターは、世界的にも巨大な意味を持つ日本近代史探究のための宝庫です。外国法文献センターは、不断に変貌する外国の法令集・判例集等を収集しています。比較法政国際センターは、外国との研究・教育上の交流を支援しています。そしてビジネスローセンター(本年四月発足)は、現在の激動しつつある経済活動に関わる法律の研究と教育を支援しようとしています(十月には、弁護士や企業法務部の方々のための「プロフェッショナル・セミナー」を主催しました)。

法学部の教育は、講義と演習の二本柱によつていきます。講義で体系的に理論と知識を学び、同時に、演習で文献読解・報告発表・討論等の能力を身に付けていく、そういう仕組みです。修士課程では、研究者養成コースの他に専修コースを設け、修士号を得た上で復職もしくは就職する人々のための教育を行っています。さらに、現在、二〇〇四年の法科大学院の設置を目指して、真剣な検討を続けていくところです。法律家の質を高めるためです。仮にそれが実現するならば、学部にも関連する大きな改革となると予想されます。



寺尾美子教授(中央)の演習風景

●二世紀の情報科学技術基盤の  
充実と新展開へ

コンピュータ、インターネット、マルチメディア、知能機械、これらによる新しい情報環境は今後の社会や産業、個人生活を支える重要な情報科学技術です。二〇世紀前半までの文明が主として機械により人間の物理的な力や速度を増幅させたのに対し、情報の科学技術は人間のコミュニケーションや知的能力を大幅に増幅させることができます。情報科学技術は生まれてから未だ五〇年位にしかありませんが、更なる今後の発展は目覚ましいことが期待されます。また、これまでの情報科学技術の主な対象が情報を扱う専門家向けであったのに対し、今後はあらゆる人が使い、あらゆる人がその恩恵に浴することを主目的としたものになってくると思われまます。

二世紀を迎えた二〇〇一年四月に新設された大学院情報理工学系研究科は、そのような社会を支えリードしていく専門家を育てると共に、世界に今後の新しい情報科学技術や考え方を提案していく活動の中核となるべく企画されたものです。同時に、目まぐるしく変化する情報ビジネスに携わっている企業の人々と密接な連携を持ち、時代の求める科学技術への観点を持ちつつ、社会へ今後の方向性を示すという役割も視野にあります。教育・研究面では、情報科学技術の基盤充実と新機軸の展開という、深さと広がりのある両面での充実と拡大を図っています。これにより旧来の学問領域の枠を越えて新しい考え方や技術を産み出し、産業を先導すると共に、社会の脳神経系ともいべき高度で知的な情報システムを構成する手法を与えて、これからの情報社会の更なる発展を切り開いていこうとしています。

●社会に開かれた研究拠点

東京大学の理工系の情報科学技術に関連した組織は、歴史的経緯から理学系研究科と工学系研究科に分散して存在していました

# 大学院情報理工学系研究科

Graduate School of Information Science and Technology

田中英彦 大学院情報理工学系研究科長

Home Page : <http://www.i.u-tokyo.ac.jp/>



筋肉のCG



2足ヒューマノイド  
ロボット



並列  
コンピュータ

「情報」は21世紀における社会と知の中軸となる基盤です。

2001年に新設の情報理工学系研究科は、この情報理工学に関する英知を結集して先進的大学院教育・研究の拠点となり、国際的にも大きく翼を広げようとしています。

が、前述の要請に応えるため、これを改組、再編し、二〇〇一年に大学院情報理工学系研究科が設置されました。研究科は表に示す特徴を持つ5専攻から構成されています。併せて、産業界との連携強化を図る「戦略的IT連携客員講座」、「バイオ情報処理連携客員講座」も設置されています。5専攻がそれぞれの特色を発揮する機能的役割分担と、その効果的集約によるスケールメリットを活かし、新たな展開に対する柔軟性を実現しています。

私達は、社会に対して常にオープンでありたいと思っております。すなわち、広く社会や産業界の多くの人々をパートナーとして、学習、研究、問題提供、情報交換、共同作業など、種々の形で関係を持ち、共に新たな領域を切り拓いていこうと考えております。そのような交流の一つの場として、定期的なシンポジウムの開催をしておりますし、また今後幾つかの協力形態を作り上げようとしています。

グローバル化しつつある今日の社会では、当然我々も国際的な意味での価値の創出が問われております。特に急展開している情報の世界では、国際的リーダーシップを発揮することが重要であり、これまでも研究発表を始めとして国際的活動を活発に行ってきたことが、なお一層の努力が必要と考えています。

大学院生はまず第一にコンピュータ、情報操作、情報伝達に関する基本原理と関連分野の技術を身に付けることとなります。この場合、専攻の枠を超えて、情報に関する基礎と応用の充実した幅広い授業を選択できることは、大きなメリットでありましょう。そして、情報の新領域の開拓、新技術、新システムの研究開発に主体的に携わることを通じて、グローバル化した世界でリーダーシップを発揮するように育っていくことを期待しております。

このように、情報理工学系研究科は情報科学技術に関する英知を結集し、二世紀に向けた情報理工学に関する先進的大学院教育・研究拠点となるものです。

学生の皆さん、社会の皆さん、私達とともに情報の新しい世界を切り開いてゆこうではありませんか。

専攻の構成と分野	
コンピュータ科学専攻	計算の基礎理論、計算システム/プログラミングとコンピュータアーキテクチャを中心とした計算システム分野の教育・研究を行い、次世代情報科学技術のコンピュータ的側面の基礎を主な研究対象とする。
数理情報学専攻	幅広い先端的科学技術分野における種々の現象を数理情報学的視点から捉え、環境の変化や技術革新に適応可能な数理情報モデルの構築と解析を行って、その情報構造を解明し、諸分野での応用を可能とする教育・研究を特徴とする。
システム情報学専攻	森羅万象を認識と行動のシステム科学の視点から捕らえ、情報学と物理学を駆使して現象の解析を行って、新しい原理や方法論あるいは機構やシステムを創出し、諸分野での応用を可能とする教育・研究を特徴とする。
電子情報学専攻	電子技術に立脚したコンピュータ・情報処理技術（ハードウェアとソフトウェア）、情報ネットワーク技術、通信システム技術、信号処理技術、メディア技術を総合的に扱い、その高度化と新技術の創出を可能にする教育・研究を特徴とする。
知能機械情報学専攻	実世界における形態、運動、構造、機能に関する情報学を統合し、自然や人間と調和する知的な機械情報システムを創造的に構築することを目的とした教育・研究を特徴とする。
(連携講座)	戦略型IT連携、バイオ情報処理連携



# UT Forum 2000 in Silicon Valley

渡辺すみ子 助教授、東大医科学研究所染色体制御分野  
▶ URL <http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/moldev/>



ポスターのデザインは  
坂村健教授によるものです

## 東京大学シリコンバレー 拠点設立

二世紀の科学の最重要分野である生命科学と情報科学は、さまざまな場面での融合を急速に進めている。その融合の最先端では、ゲノム情報の解読のためのバイオインフォマティクス(生物情報科学)の開発のために、各国の研究者がしのぎを削っている。残念ながら、わが国はこの分野では米国の先端研究から大幅な後れを取っており、また、産学連携の具体策などについても諸外国と比べて米国内からは学べることが多い。

このような状況を打開するために、われわれは東京大学学術研究奨励資金の援助を受け米国カリフォルニア州スタンフォード大学の隣接地に海外学術交流拠点を1999年に設立した。この地域はコンピュータサイエンスの発祥と成長の原動力となったシリコンバレーに隣接し、数多くのベンチャー企業が、大学と産業界の積極的な連携によって育成され、遺伝子工学の萌芽的、先端的な研究を行なっている。われわれは、ここを拠点として、この地域での情報収集、学生・研究者の教育、スタンフォード大学をはじめとする数多くの最先端研究機関との共同研究の推進をはかっている。

## UTフォーラム2000 イン・シリコンバレー

この拠点でのさまざまな活動をはじめとして、東京大学全体の情報、生命科学の研究、人材などを、この地域の大学、企業の研究者、ベンチャー企業などに幅広く紹介し、国際的な学術・産学の交流をはかることを目的として、UTForum (University Tokyo Forum) 2000が、スタンフォード大学を会場として開催された。フォーラムは二日間にわたり、初日午前はプレフォーラムとして、日米の大学関係者とバイオベンチャー創設者が、大学運営の戦略とバイオ起業についての日米の実情を語った。プレフォーラム午後にはカリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)の建設中の新キャンパスミッショントレイ、南サンフランシスコからパロアルトのバイオベンチャー企業数社の見学を行ない、最終訪問先のベンチャー企業では東京大学主催の夕食会を催し交流を深めた。翌日の本フォーラム前半では、前連貫重彦東京大学総長、スタンフォード学長 John Hennessy 博士、UCSF 副学長 Zach Hall 博士、医科学研究所新井賢一所長らによって、大学運営の現状と将来構想について講演を行った。後半には三大学に所属する生命科学の研究者による講演があった。本シンポジウムには東大の学生20名を含む100名以上の大学関係者、企業関係者などが参加し、シリコンバレー地域の現状について直接の見聞をひろげるのみならず、異分野の参加者間での貴重な交流を行なった。このように本フォーラムでは、通常の学術交流のみならず大学の研究者、経営者、企業の研究者、経営者さらには政府機関の関係者が新しい提携による戦略構想を模索する貴重な場を提供できたと自負している。今後この活動を基盤にして、多くの新しい展開がはかれることを期待している。



初日：プレフォーラムの様子



ベンチャー企業での夕食会



スタンフォード大学のノーベル賞学者コーンバーグ博士と



演者・オーガナイザー



シンポジウム会場



かがみわり

## 東京大学公開学術講演会 - 第1回 - 夏の夕べ 知の泉へ

福山 透 大学院薬学系研究科教授

梅雨明け宣言が出された七月二日の夕方、表題の第一回公開学術講演会が安田講堂で開催されました。東京大学と社会の連携強化を重視する佐々木毅総長が情報発信の一環として発案されたもので、猛暑にもかかわらず五〇〇名以上の方々が来聴されました。

「東京大学で行われている優れた研究の一端を、広く学内外の方々々に味わっていただくのは大学の義務であり、今日は素人としてお話をしてみたい」という総長の開会挨拶の後、本年度狼橋賞を受賞された理学系研究科水原裕子助教授(現教授)が「太陽系や地球の原物質をさぐる」という演題で講演されました。星の一生と宇宙の輪廻という壮大なストーリーの中で、隕石の中のコンドリュールという粒子の組成、形状から、同位体測定法や研究室での実験により、これらが太陽系形成の初期(二〇〇一〇〇〇万年の間に急速に冷却されて生成したことが明らかになった)と推定されています。

ここで話は一気になりに戻り、本年度紫綬褒章を受章された総合文化研究科浅島誠教授が「動物の形づくりと器官形成」というタイトルで、受精卵からの個体発生プログラムについて講演されました。ツメガエルやイモリの胞胚のアマルキップ(未分化細胞塊)をアクチビンというタンパク質存在下に生理食塩水中で培養すると、濃度によって血球や筋肉に分化することや、更にレチノイン酸という物質で処理することにより、心臓にまで分化するというマジックかと思わせるお話でしたが、臓器の再生医療が夢物語ではないことを聴衆に実感させました。

最後の演者であり、同じく本年度紫綬褒章を受章された宇宙線研究所の戸塚洋二教授は、「カミオカンデ、スーパーカミオカンデ、そしてハイパーカミオカンデへ」についてハイパーカミオカンデへ「ニュートリノ研究の現場から」という演題で、本郷から遠く離れた岐阜県神岡町の地中に深くに設置された宇宙線粒子観測装置を用いた研究について講演されました。三種類ある素粒子ニュートリノの質量の有無で宇宙の未来が見える、という有機化学を専門とする筆者の理解を遥かに越えるテーマから始まり、大気圏中で発生したニュートリノが、頭上からの地球の反対側から地球を貫通してきたものと成分比が異なることが明らかとなり、少なくとも二種類のニュートリノには質量が存在することを世界で初めて発見されました。

閉会挨拶で廣渡清吾総長特別補佐が「何もお出しできないが、知の泉で十分にとを潤されたことと思う」と言われたように、この講演会が聴衆の半数以上を占めた若い人々の知的好奇心を大いに刺激し、豊かな人間形成に役立つものと思います。次回の公開学術講演会は顕著な業績をあげた数名の講演者が選定された後に開催されますが、初回の参加者で希望される方には郵便、電子メールなどで開催予定をお知らせすることになっています。

**太陽系や地球の原物質をさぐる**  
 永原裕子  
 理学系研究科 助教授 (現教授)  
 本年度狼橋賞受賞

**動物の形づくりと器官形成**  
 浅島 誠  
 総合文化研究科 教授 本年度紫綬褒章受賞

**カミオカンデ、スーパーカミオカンデ、そしてハイパーカミオカンデへ**  
 ニュートリノ研究の現場から  
 戸塚洋二  
 宇宙線研究所 教授 本年度紫綬褒章受賞

## 宇宙の地図と銀河の進化

岡村 定矩 大学院理学系研究科教授 (天文学専攻)



子供の頃、山々を分け入って突然ひっそりとした秘密の沼を発見したり、ようやくたどり着いた隣の公園で遊んだり、今から思えば何でもないところでも、探検して初めて出会った新しい世界に感動した経験は誰もが持っているでしょう。

▶ 本文へ続く

### 宇宙の地図

自分の住んでいる世界の周りには何があるのか、その向こうには何があるのか、それを知りたいと思うのは人類の根元的な欲求なのでしょう。大航海時代に探検家が世界を旅して地球の地図を作ったように、天文学者は現在宇宙の地図を作っています。宇宙の地図に描かれるのは銀河です。銀河は星とガスが万有引力で集まった巨大な集団です。一つの銀河には100億個の桁の星があります。天の川は、太陽が属する一つの銀河（銀河系）の星々が密集している姿です。銀河は、渦巻きのあるもの、渦巻きのない楕円形のもの、不規則な形のものなどさまざまです。多数の銀河が宇宙の中でどのように分布しているのかを記したものが宇宙の地図なのです。

宇宙の地図は面白いパターンを示しています。銀河のあるところとないところのはっきり分かれています。銀河はシートあるいはフラメント状に分布し、銀河のない空洞（ボイド）を取り囲んでいます。一億光年以上にも広がるこのような宇宙の大規模構造は、力学的な緩和が進んでいないために、宇宙初期の情報をその中に保存しているのです。未だに正体の分かっていない暗黒物質の性質を知る手がかりも含まれています。決して訪れることのない場所の地図ですが、宇宙の成り立ちを知るには是非とも必要なのです。

### あなたのパソコンにも宇宙の地図が

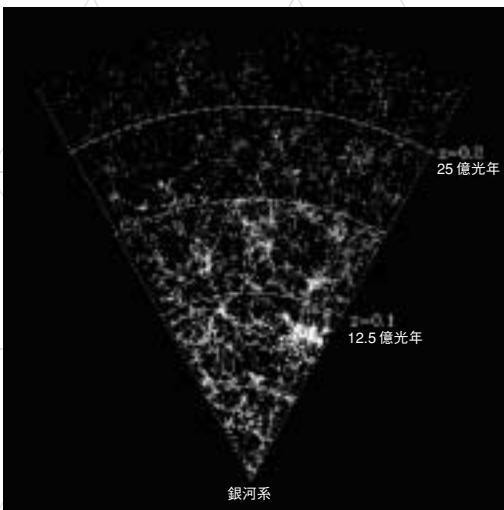
かつてない規模で遠くまで宇宙の地図をつくる米・日・独の共同プロジェクト、スローン・デジタル・スカイ・サーベイ (SDSS) は、試験観測で得た初期データをこのほど全世界に公開しました。高感度のCCDカメラで撮影した4000平方度の空の画像、そこに含まれる2000万個の天体のカタログ、距離を測定するために取得された五万個あまりの銀河のスペクトルがインターネットを通じてどこからでもアクセスできます。

アメリカのニューメキシコ州にあるアパッチポイント天文台で、口径25mの望遠鏡に付けられたCCDカメラの上を、日周運動によって夜空がゆつくりと流れて行く様子も実感できます。夜、部屋の明かりを消して見ると、そこはもうパソコンのスクリーンではありませぬ。宇宙を旅する楽しさを存分に味わって下さい。

### 地図の彼方へ

人類が作る最大のものであっても、SDSSの宇宙地図は二億光年くらいから先は次第にぼやけてきます。さらに先を見るには、もっと暗い銀河を観測する必要があります。我が国がハワイに建設した「すばる」望遠鏡のような大口径望遠鏡は、空のこく狭い所しか観測できませんが遠くまで届きます。そこではもはや私たちは、距離を旅するだけでなく、宇宙史を遡って時間をも旅するのです。宇宙では遠くを見ることは過去を見ることです。現在から二五億年前までの期間は、銀河にとつてはほとんど

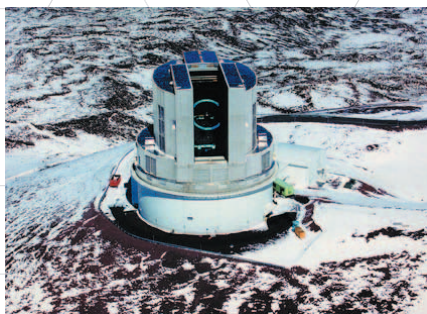
ど変化のない期間でした。しかし大望遠鏡が捕らえる数十億年以上昔の銀河は成長期にあります。誕生後間もないものも見つかるかも知れません。SDSSが捕らえる成長した銀河たちと、すばるが捕らえる成長期の銀河たち、両者の体系的な比較研究による銀河進化の解明に大きな期待がかかります。



SDSSの宇宙地図。一つのスライスの中の銀河の分布を示す。銀河系は扇の要の位置にあり、点の一つ一つが銀河である。(z=0.2は約25億光年の距離に対応)



SDSSのデータが公開されているウェブサイト (<http://skyserver.fnal.gov/jp>)



すばる望遠鏡

# ITで解き明かす古代中国正統論争

平勢 隆郎 大学院情報学環教授



一般に、歴史上の年代はあまり動かないという前提があります。わからない場合は、わからないというのが普通ですし、論争がある場合は、論争中と説明されます。ところが、中国古代の歴史書に問題があったということがわかってきました。その歴史書から得られた年代で歴史を組み上げてきたのだから大問題です。

[▶ 本文へ続く](#)

前二世紀に作られた『史記』には、国ごとに年代を追って事件を並べた本紀（王・皇帝）・世家（諸侯）というジャンルがあります。同じ事件はあちこちに記されています。その事件を『史記』中に示された各国君主年代の二覧によって年代決定してみますと、同じ記事なのに年代が違うことがままあります。始皇帝の統一（前二二一年）までの記事で、年代が議論できる部分を抜き出してみますと、約二九〇〇カ所ほどありますが、そのうち約八三〇カ所について、複数の年代が得られます。『史記』には膨大な年代矛盾があるのです。

この年代矛盾を説く鍵は、君主の元年がいつから始まるかの誤解にあります。中国君主の年代は、伝統的に新君主が即位した翌年をもつて元年としてきました。即位した年は死去した前君主の残りとして扱われるわけです。『史記』に示された君主の年代は、この伝統的方法（踰年称元法といいますが、踰とは越える意味で、年を越して元年を称します）で配列されています。ところが、矛盾を解消する過程で、この伝統的方法は前三三八年に齊で始まったものであることがわかってきました。踰年称元法が始まるまでの一般的な方法は、昭和・平成のように新君主が前君を嗣いで即位し、らすみやかに元年とする方法（立年称元法という立とは即位のこと）でした。前二世紀の『史記』の整理者たちは、このことがわかぬまま、立年称元法によって残されていた年代記事を、踰年称元法のもので誤って整理してしまったようなのです。

立年称元法の元年は前君主死去の年、踰年称元法の元年は前君主死去の翌年ですから、ある君主一代の間は一年の違いですみますが、何代にもわたって年代を積算していきますと、代を追ってずれが増大します。『史記』の整理者たちは、すべて踰年称元法による年代だと誤解したまま、立年称元法によって残されていた代々の君主の在位年を積算し、孔子の死去した年など、自分たちの時代と何年違うか特定できた年代との間で、だぶつきを発見します。称元法の誤解に気づかぬまま、そのだぶつきは二十年（廿年）を三十年（卅年）に誤

つたのだなどといった言わば勝手な判断で削られた。そのため、国ごとの記事はあちこちで大幅にくるってしまったというわけです。

これに人の取り違えなどがからんで、矛盾はいくえにも作り出されてしまったというものが、私の分析結果です。

その分析に沿って本来の年代配列を復原してみますと、ずれはきれいになくなりません。いくつかの条件を勘案しての結果ですから、どの条件をとるかで将来微修正があるかもしれません。今のところ、大きな問題は出ていないようです。

いにしへの学者が同じような整理作業を行おうと思えば、広い空間と縁台、そしてメモが風に吹き飛ばされないような工夫を凝らした作業場が必要であつたらうと思います。ところが、私は、この整理作業をパソコンで行いました。パソコンなどというと大げさで、データベースソフトにこまめに打ち込んだだけなのですが、用いたスペースは机一個にすぎません。しかも、この種のソフトでは、キーボードの打ち込みさえ間違わなければ、同じ記事を串刺し状態で拾い上げてもらえます。あとから拾い上げて、同じ記事はこんなところに潜んでいたのか、とびつくりすることになりました。こんな経験は、いにしへの学者にはできなかったわけです。

さて、整理結果が正しいとすると、別に潜んでいた大きな問題が浮上します。踰年称元法は、帝王の制度のひとつとして他のさまざまな制度とからみあつてくるのです。その制度が前四世紀半ばを遡らないということが改めて明らかになったわけです。この制度は、夏王朝や殷王朝・周王朝の制度として代々の学者が議論してきたものであります。その帝王の制度はその時代にはなかったということ。誤解のないように言っておきますと、これらの王朝があつたかなかったか、どんな名前の王朝だったかは別に検討される問題です。しかし、代々夏・殷・周の三代を理想的時代だとして論じていたそのいにしへの理想は、前四世紀半ば、つまり孔子が死去してから百数十年もたつてから出現したものだということになるわけです。この事実の持つ意

味はいたって深刻です。その深刻さの背後では、中国古代に複数存在した正統どうしの抗争が渦巻いていることもわかってきました。

ついでに述べますと、帝王の制度を前提にしていたために確定できなかった殷王朝の滅亡年代も、関係史料（伝文文献・甲骨文・金文）に矛盾なく決定できそうだということがあります。これについては、写真として掲げた拙著に述べたところがありますので、ご参照ください。今後の研究の進展に期待するところをあちこち述べつつ送り出した本です。



明代「三才図会」清刊本（東京大学東洋文化研究所蔵）より司馬遷像

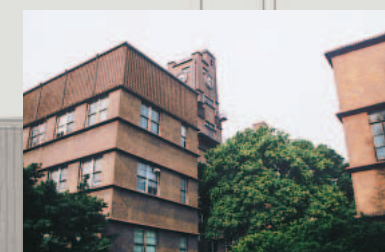
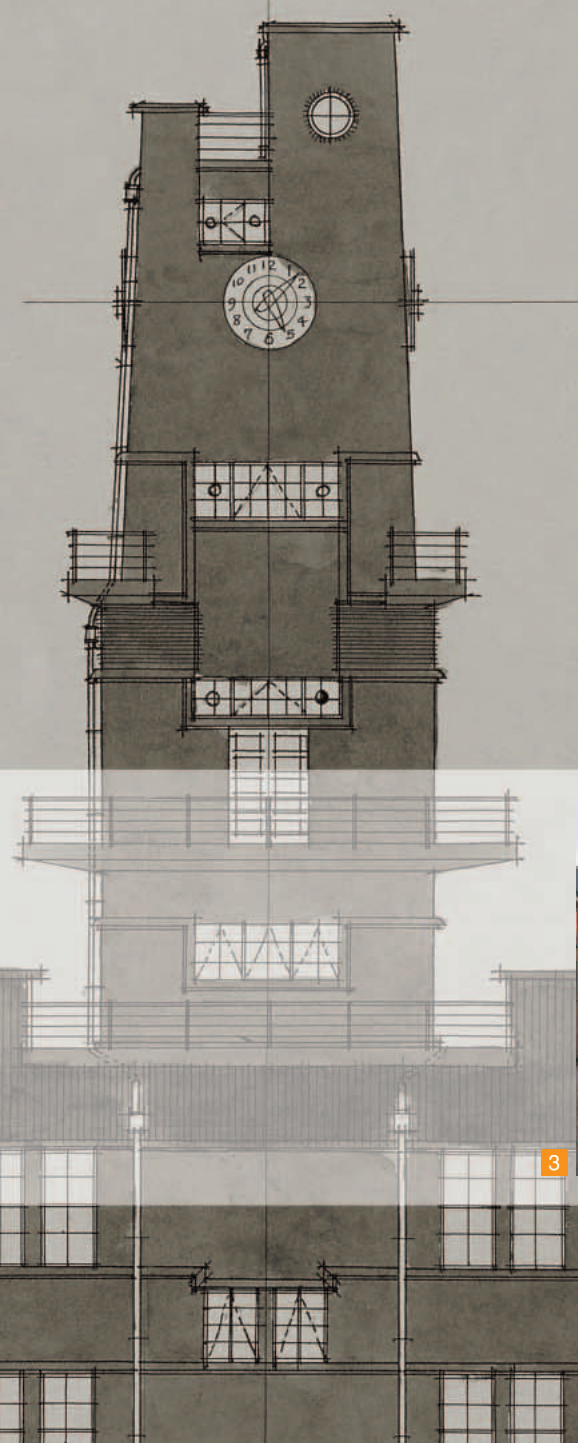


(2001年6月、第二版8月)

大学の「登録文化財」を見る

岸田 省吾

大学院工学系研究科助教授



最

近、登録文化財制度というのが始まった。築五〇年以上経ち、多くの人に親しまれてきたような建物なら、審査を受け、文化庁に登録できる。東大も早速、いくつかの建物を登録した。今回はその中から紹介されることのない二つの建物を選んでみた。

一つは、駒場Ⅱキャンパスにある旧航空研究所の本館（現先端科学技術研究センター三号館、昭和四年）である。キャンパスの正門を入って真正面の奥に据えられた建物がそれである。周囲の鬱蒼とした緑の中、左右手前に試作工場と風洞棟を従え、時計塔がひととき高く聳える。東大の附置研究所の中で随一の偉容を誇った、と言われることも頷ける。

とりわけ時計台のデザインはユニークである。前面に微妙な膨らみを持ち、幅も頂部に向かってわずかに絞られている。時計まわりの円形や四角の窓、途中にはりついたバルコニーも見る角度によって表情を変え、設計者の遊び心が感じられる。

時計台下の建物本体も斬新なものだ。全体は周囲の建物より暗い色調を帯び、まごころなし引き締まって見える。正面の大きな壁面は軒線下だけ凹凸のある仕上げで、全面に強い抑揚が与えられている。無駄な装飾が少なくことと相まり、単純な形による構成の中に力強い印象が生み出された。

設計は、内田祥三（二代総長、元建築学科教授）の門下生であった岸田日出刀が担当した。内田は当時急ピッチで進められていた本郷キャンパスの震災復興計画で手一杯であったのだろう。当時の最先端分野の研究所を二手に任せられ、岸田はこそとばかり腕をふるい、のびのびとデザインを楽しんだようだ。

航空研の設計が始まった頃、ヨーロッパでは新鮮な感覚の建物がいくつも現れていた。ウィーンのヨーゼフ・オルブリッヒやアムステルダムのカール・デ・クラークといった建築家の作品である。旧航空研の建物を見ると、岸田はかの地の新建築に強い共感を覚えていたに違いないと思う。

余談になるが、東大のメインキャンパスである本郷でも、内田門下生たちによるこうした建物が出現した。附属病院の南研究棟（赤煉瓦棟）や旧夜間診療所（現広報センター）である。内田の代表作である大講堂で

すらその影響が窺える。ここで、本郷にあるもう一つの文化財、工学部列品館（大正二四年）を見てみよう。本郷キャンパスの正門を入りすぐ左手にある薄茶色のこじんまりとした建物である。内田の代表作の一つで、その後のキャンパスの成長にとってもたいへん重要な建物であった。

内田はこの建物で、後に「ウチダゴシック」と呼ばれる独特のスタイルを確立し、震災で壊滅したキャンパスをすばやく、かつ統一感あるキャンパスとして再生させた。

本郷では明治以来の伝統となっていたゴシック的な意匠を地震に強いコンクリート造で継承すると共に、建物の構成も統一した。階数を三階で止め、建物の中心には光庭をとる。エレベーターが不要となり、十分な通風と採光も確保できた。外壁のスクラッチタイル（溝付きタイル）も、色むらや壁の不陸（凹凸）を目立たせない合理的なものであった。

中に入ると、正面に堂々とした階段が鎮座している。これは列品館がもともと種の博物館であったことに関係する。一つの階段だけで、建物の中を三階から二階まで一筆書きで巡って行ける。名称の列品館というのも、学術標本を並べ、公開する、すなわち「列品する」ことに由来している。

この建物で特筆されるのは、法文校舎などとともに正門から大講堂に続くキャンパス中心部の景観を作っていることだ。「文化財」としてはむしろ、建築群の「要素」として環境の形成に役立っていることの意義の方が大きい。

本郷キャンパスは、そもそも日本における近代大学初のキャンパスである。統一的なスタイルの建物と豊かな緑が一体となって形成するキャンパスの環境そのものが、「大学キャンパス」という一九世紀から二〇世紀にかけて生み出された空間形式を、稀に見る密度で蓄積する文化財と言っても大過ない。

大学にとって重要なことは、そうした文化財を所有することや言うより、それを現実に生きているキャンパスとして使い続ける、つまり「文化を行為する」ということではないだろうか。そんなことを考えながら今回の散歩を終えることにする。



問い合わせ:研究協力部国際交流課  
TEL: 03-5841-2091

総合研究博物館 小石川分館  
(学校建築デジタルミュージアム)

11月12日(日)開館

URL: <http://www.um.u-tokyo.ac.jp>



史料編さん所史料集発行100周年記念  
特別展及び国際シンポジウム



1 特別展  
「時を超えて語るもの—史料と美術の名宝—」  
12月11日(火)~14年1月27日(日)  
東京国立博物館平成館

2 国際シンポジウム  
「近代歴史学と史料」  
14年1月25日(金)、26日(土)  
東京大学山上会館  
問い合わせ:史料編さん所庶務掛  
TEL: 03-5841-5943

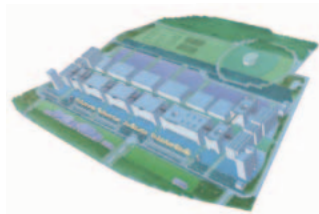
## 一般公開

東京大学柏キャンパス一般公開

11月2日(金)、3(土)

千葉県柏市柏の葉5-1-5,宇宙線研究所、  
物性研究所、大学院新領域創成科学研究科  
問い合わせ:柏地区事務部企画課

TEL: 0471-36-3107



## その他

駒場祭

11月23日(金)~11月25日(日)

第2回東京大学公開学術講演会

11月30日(金)

東京大学 本郷キャンパス 安田講堂

問い合わせ:東京大学「学術講演会事務局」

TEL:03-5841-2046

URL: <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/admin/k-kouen.htm>



## 世阿弥 シンポジウム

七月七日(土)から九日(月)の三日間にわたって、  
大学院総合文化研究科  
超域文化科学専攻表象文化論研究室と、  
能の上演団体「橋の会」の共催により、  
第一回世阿弥国際シンポジウムが開催された。

(国立オリンピック記念青少年センターの国際会議場と小ホール)

日本を代表する伝統文化に位置づけられる能・狂言の世界を、とりわけ世界の演劇史上傑出した理論家であり劇作者・役者でもあった世阿弥を焦点としながら、現代の多様な関心の下で新たに問い直すことを目指して、国内外の多くの研究者や演劇人による活発な討議が行われた。

初日は実行委員長である本学名誉教授 渡邊守章氏(現放送大学副学長)による基調講演に引き続き、祝祷能「翁」の上演が行われた。これを承けて討議1「アジアの中の翁」では、能の始源的な形をとどめる翁共に対し、中世の東アジア世界に通底する宗教性という観点から新たな光をあてる試みがなされた。討議2「外から見た世阿弥」では、スイスとフランスからの報告者により、主にフランス語圏での世阿弥の受容とそのインパクトについて、それぞれの個人的関わりも交えた紹介がなされた。

二日目冒頭の討議3「能の身体」では、能の演技を支える独特の身体性について、現代と世阿弥時代の切断と連続の問題を軸にして議論が交わされた。続く特別企画「二世紀の世阿弥」では、はじめにピーター・ブルック、ロバート・ウイリソン等、現代を代表する六人の演出家へのビデオ・インタビューが上映された。自らにとつて世阿弥の存在を、このシンポジウムに寄せて初めて語った貴重な映像である。次に松岡正剛氏による同テーマでの講演が行われた。

最終日は、まず討議4「謡曲のことはとこころ」において、世阿弥の謡曲作品に対する多様な文学的読解の可能性が探



写真提供:「橋の会」

## 公開セミナー

### 第21回農学部公開セミナー

11月17日(土)  
東京大学弥生講堂 一条ホール  
問い合わせ:農学系総務課広報情報処理掛  
TEL: 03-5841-5484, 8179

### 平成13年度生産技術研究所セミナー

11月16日(金)、14年1月18日(金)  
生産技術研究所  
問い合わせ:(財)生産技術研究奨励会 生研セミナー係  
TEL: 03-5452-6093, FAX: 03-5452-6096

## 公開講座

### 千葉演習林公開講座「緑の教室」

10月23日(火)  
千葉演習林  
問い合わせ:千葉演習林天津事務所  
TEL: 0470-94-0621, 0059

### 愛知演習林公開講座

「親子森林科学教室」  
11月24日(土)  
愛知演習林  
問い合わせ:愛知演習林事務所  
TEL: 0561-82-2371

### 愛知演習林大学等地域開放特別事業

「巣箱を作って野鳥を観察しよう」  
14年3月17日(日)  
愛知演習林  
問い合わせ:愛知演習林事務所  
TEL: 0561-82-2371

### 愛知演習林公開講座

「ふれてみよう演習林の自然」  
11月25日(日)  
愛知演習林事務所  
問い合わせ:愛知演習林事務所  
TEL: 0561-82-2371

### 秩父演習林公開講座

「奥秩父のカエデを楽しもう」  
11月3日(土)  
秩父演習林栃本管内  
問い合わせ:秩父演習林事務所  
TEL: 0494-22-0272

### 第1回東洋文化研究所公開講座

「アジアを知れば世界が見える—アジアの藝」  
12月1日(土)、12月2日(日)  
東洋文化研究所  
問い合わせ:東洋文化研究所研究協力掛  
TEL: 03-5841-5836, FAX: 03-5841-5898  
募集時期等:10月1日(月)~10月31日(水)  
ハガキ、メールで予約受付。定員になり次第締め切り。  
応募者多数の場合抽選。

### 第24回生産技術研究所公開講座

「イブニングセミナー「都市のサステナビリティ」」  
9月28日(金)~14年1月18日(金)(毎週金曜日)  
<10月19日,11月23日,12月28日,1月4日は休講>  
生産技術研究所B棟7階第一会議室  
問い合わせ:生産技術研究所庶務掛  
TEL: TEL03-5452-6008~9  
URL: <http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/iis-j.html>

## 一般公開

### 田無試験地休日公開

11月25日(日)、9:00~13:00  
演習林田無試験地  
問い合わせ:田無試験地事務所  
TEL: 0424-61-1528

## シンポジウム等

### 「海洋生命系のダイナミクス」

12月25日(火)、26日(水)  
国立オリンピック記念青少年総合センター  
問い合わせ:海洋研究所、新プロ事務局  
TEL: 03-5351-6821.6822  
URL: <http://www2.ori.u-tokyo.ac.jp/~shin-pro/>

### 第3回海洋環境に関する国際ワークショップ

「The 3rd UNU-ORI Joint International Workshop for Marine Environment-Coastal Ecology, Nutrient Cycles and Marine Pollution」  
10月21日(日)、~10月26日(金)  
岩手県上閉伊郡大槌町赤浜2-106-1  
問い合わせ:海洋研究所附属大槌臨海研究センター  
TEL: 0193-42-5611  
\*昨年の会議では、14ヶ国30名をこえる研究者が参加しました。

### フロンティアサイエンスフォーラム

「生き物はおもしろい—先端生命科学からみた生物—」  
11月3日(土)  
国立がんセンター講堂(柏市)  
問い合わせ:新領域創成研究科総務掛  
TEL: 03-5841-8832

### 第2回東京大学・ミュンヘン大学シンポジウム

「大学の倫理」  
14年3月21日(木・祝)~23日(土)  
山上会館大会議室  
問い合わせ:社会科学研究所 企画交流掛  
TEL: 03-5841-4902

## 特別講義

### 利根川 進MIT教授、学習と記憶センター所長による特別講義

14年1月8日(火) 14:00~15:30  
大講堂(安田講堂)  
問い合わせ:研究協力部国際交流課  
TEL: 03-5841-2091

## 公開討論会

### 大学の教育研究体制と運営システム

14年1月11日(金) 15:00~17:30  
大講堂(安田講堂)  
パネリスト:利根川 進(MIT教授) / 加藤 紘一(衆議院議員) / 立花 隆(評論家、元本学先端科学技術研究センター客員教授) / 廣川 信隆(医学系研究科教授) / 黒田 玲子(総合文化研究科教授)  
司会者:小間 篤 副学長(理学系研究科教授)

## 「淡青」5号 読者 アンケート

東京大学広報委員会では、今後の誌面作りの参考とさせていただくため、読者の方々にアンケートを実施することといたしました。大変お手数をかけて誠に申し訳ございませんが、次の項目についてご意見を伺いたいと思いますので、メールによりお寄せいただければ幸いです。

次の項目について本誌の印象をご記入願います。

1. デザイン・記事構成、頁数等、誌面全体としていかがですか?
2. どの記事がお気にいりですか? また、ご不満ですか?
3. 今後、どのような特集・記事をお望みですか?
4. 発行回数について、いかがお考えですか?(現在、年2回)
5. その他、ご意見をご自由に記入ください。

アンケート提出先:東京大学広報委員会(広報室)

住所:〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 / 電話:03-3811-3393 / FAX:03-3816-3913 / mail:kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp

# 淡青

[TANSEI] 東京大学広報誌 第5号 The University of Tokyo Magazine October, 2001 Vol.5

2001.10 5  
October, 2001

編集発行 東京大学広報委員会

編集委員 石川正俊(大学院情報理工学系研究科教授) 森 裕司(大学院農学生命科学研究科教授) 中山洋平(大学院法学政治学研究所助教授) 岡 隆(大学院人文社会系研究科助教授)  
牧野淳一郎(大学院理学系研究科助教授) 三田智文(大学院薬学系研究科助教授) 河東泰之(大学院数理学研究科教授) 伊東 乾(大学院情報学環助教授)

発行日/平成13年10月31日 編集発行/東京大学広報委員会 印刷/サンニチ印刷

東京大学総務部総務課広報室 〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 TEL:03-3811-3393 FAX:03-3816-3913 E-mail:kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp URL:<http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

ヨ一君は肥っている。大学受験を半年後に控えて、才色兼備のアリサが通う高校にもとげとげしさが牙をむき始めた。でもアリサの教室がまあ平穏なのは、まったくもってヨ一君のおかげではないだろうか。

ぱんぱんにふくらんだ頬つべたとおでこ、そのあいだの小さな目と口。頭全体がいれば惑星で、巨大な太陽を思わせるまん丸な胴体にちよこんと載っている。そんなヨ一君の宇宙的肉体は、いわゆる現代の悪、ストレスや憎悪を吸いとる「いやし玉」なのである。

いつも黙ってにこにこしているヨ一君のことを、少し知恵遅れではと陰口をたたく生徒もいる。そういう下品な連中を、アリサは侮蔑のひとつにらみで黙らせてしまふのだ。雌鹿みたいな濡れた瞳と水蜜桃そっくりの乳房。それゆえアリサは、全男子生徒が発する欲望と阿諛追従のシャワーをさぶさぶ浴びているのだが、ヨ一君の側に寄ると、まるで体内の水分がとめどなく吸いとられていくような気がするのだ。これはむろん、アリサのなかに高慢な邪悪さがたっぷり溜まっているためだったが、アリサ自身はまったく気づいてはいなかった。

ともかくアリサはヨ一君が気になつて仕方がない。その時価一億円の眼差しは、きれいにそろった睫毛の下からヨ

## ヨ一ヨ一君と気球

paragraph 01

西垣 通

ヨ一君の分厚い脂肪層をサツと撫でまわす。さりげなく近づいて甘い息を吹きかける。ところが、アリサの乳首のうずきも何のその、ヨ一君はいつも泰然自若なのだ。あるとき事件がおきた。ヨ一君が恋におちたのである。

残念ながら相手はアリサではなかった。なんと気球なのである。科学部が観測のために使っている気球、てっぺんから四分の三があざやかなオレンジ色で、残りの下側が銀色に輝く巨大な気球。

ヨ一君は例の通り何も言わない。ただ窓から、校庭から、屋上から、ぼーんと口をあけ、空をただよっている気球を眺めているだけ。だがアリサだけはすぐに異変を察知する。

「ね、ヨ一ヨ一、あれに乗ってみたいんでしょ。ちがっ？」

いつも眠つたような目をしているヨ一君は、初めてアリサの顔を正面から見つめ、ぼつちり目を見開いてこくりと頷いた。

翌日、アリサは科学部の部長をしている秀才のケンジに頼みたい。ケンジは、アリサにこれまで無視され続けたうらみもあり、模擬試験で負けたくやしきもあり、あれは普通の人間をのせるための気球だ、ヨ一ヨ一みたいな化け物は体重オーバーでとても無理だと言いつ張つたが、

なに馬鹿なこと言つてるの、それつて差別になるよ、だめなら測定機械を下ろせばいいじゃないと反論するアリサの水蜜桃のふくらみが怒りで勢いよく上下し始めると、ヘナヘナとだらしなく承知してしまつた。

その日はよく晴れ上がった。ケンジは二ヒルな作り笑いを浮かべながら、それでもアリサの頼みに応えられるのが嬉しくていそいそ準備をし、下級生に偉そうにあれこれ命令を下し、気球はやがて勢いよく膨らみ始めた。やや緊張した顔つきのヨ一君がボールのような身体を座席に押し込み、みんなの歓声のなかで気球がゆつくり上昇を開始したとき、アリサはどうかしてヨ一君が二目、自分のほうを見てくださいないだろうかと無駄な歯ざしりをした。

やがて気球は高く、高くあがつた。青い空。オレンジと銀の球の下、はるかに浮かぶもう一つの玉。地上をおおう無意味で残酷な悲しみ、それらの底知れぬ重量をこごとく引き受ける、不思議な天の二点。

周囲のざわめきも耳に入らず、アリサは少し涙ぐみながら立ちつくしていた。今ようやくアリサには分かつたのである。ヨ一君はもしかしたら、二度と地上に戻つてこないということ。つまり、この世の人ではないということ……。

にしがき とおる： 東京大学大学院情報学環教授

